再臨のキリストによる
第７福音書
インターレグナム
—二つの王国の媒介—
THE GOSPEL
BY CHRIST OF
THE SECOND COMING No. 7
INTERREGNUM
I
SEIDOU
正道

目次

インターレグナム　第一部「星」

第7福音書 …… 3

全体の目次 …… 3

第1章　神秘詩　超新星

（1）出会い …… 6

（2）星との契り …… 7

（3）予言と使命 …… 10

（4）約束の記憶 …… 12

（5）光の情景 …… 14

（6）エピローグ …… 15

（7）祈り …… 17

第2章　ノストラダムスの黙示録

（1）超新星の体験 …… 19

（2）大きな転換の予言 …… 21

（3）完成まで続く役割 …… 25

第3章　神秘数一七

（1）一七という数字が持つ意味 …… 28

（2）終末の語意 …… 30

（3）アルファでありオメガ …… 31

第4章　ベツレヘムの星
（1）イエスの誕生日 …… 36
（2）イエスの星、私の星 …… 38
（3）神秘の世界へ …… 39
第5章　星が私に語ること
（1）イエスの星 …… 43
（2）壮絶なる星の死 …… 46
（3）星の愛と自己犠牲 …… 49
（4）星の授受 …… 51
インターレグナム　第二部「父」
追悼の辞 …… 54
『ヨハネによる福音書』より …… 54
第6章　父と子
（1）此岸と彼岸 …… 56
（2）父との関係性 …… 57
（3）肉の目で見える父 …… 59
（4）偉大なる父神 …… 62
第7章　インターレグナム
（1）つなぎの王国 …… 66
（2）救いの権能のゆくえ …… 68
（3）悲劇を超えて …… 70
第8章　陽のあたる場所
（1）キリスト教との出会い …… 73

（2）幸福の科学との出会い……74
（3）日照期間……77
（4）信仰告白……79

インターレグナム　第一部「星」

第7福音書

再臨のキリストによる
第七福音書

インターレグナム

――二つの王国の媒介

光り輝く星は、夜空の美しい装い。
主の高き所できらめく飾り。
聖なる方の命令で、
星は定められた場所につき、
見張りの務めを決して怠ることはない。

『シラ書（集会の書）』より

※本書は詩形の文章が多いため、縦書きでアップロードします。また、これまで引用文はイタリック表記にしてきましたが、縦書きのイタリックは視覚的に気持ちが悪いので、引用文であっても、通常のフォントで表記することにしました。

全体の目次

第1部　星

第1章　神秘詩　超新星
――ある夜の記録

第2章　ノストラダムスの黙示録

第３章　神秘数一七
第４章　ベツレヘムの星
第５章　星が私に語ること

第２部　父

第６章　父と子
第７章　インターレグナム
第８章　陽のあたる場所

第３部　葵

第９章　ポール・ソロモンの予言
第10章　奉還と恭順
第11章　二匹の獣

第４部　祈

第12章　明けの明星の宿命
第13章　転換の福音
第14章　父神への祈りと星の声

第1章　神秘詩　超新星

（１）出会い

東方で見た星が先立って進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった。学者たちは、その星を見て喜びにあふれた。『マタイによる福音書』

三九年ぶりです。騒然としております。私も弟子たちも……
皆が驚愕し、この事実を重く受け止めました。セイドウさん、《超新星》が起きました！
二〇一三年四月一六日、
二〇時二一分　Ｎ先生より

占星術師によると、
二〇一三年、四月一六日の夜、
僕の運命が、
暗い闇の底から抜け出したとき、
それと時を同じくして、
お前はここにやってきた。

超新星、
霊的世界のスーパー・ノバ。

宇宙のどこかで生まれたお前は、
はるか人知を超えたスピードで、
この地球へと、やってきたのだという。
ただ一つの座標、すなわち、
僕という人間を目指して。
僕という人間に、
ただ会いに来るために。

これ以前に、お前が生まれたのは、
今から、三九年も前だったそうだね。
そして、その超新星爆発のときには、
お前が宇宙からもたらした光は、

この地球の全体に放散し、
多くの人々に、幸せの恩恵を、
遍く分け与えたのだという。

でも、今回の来訪は、
三九年前のそれとは異なり、
お前は、僕に向かってまっすぐに、
少しも放散することなく、
純粋な光の塊としてやって来た。
本当に、前の時とは違いすぎて、
だから「こんなことはあり得ない」
と、そう占星術師は言っていた。

「けれど、それがあるとすれば、
あなたと、超新星との間には、
何か特別な結びつきがあるに違いない」
そう彼女（占星術師）は言う。

そして、それは事実だった。
事実、
前回お前がやってきた三九年前は、
この僕が、この世に生まれた年だ。
しかも、この年には、
僕の宿命を指し示す、
ある重大な予言が残されている。
が、かかる予言の内容については、
少し後で述べることにしよう。

（３）にて叙述

（２）星との契り

超新星によって地球に降り注ぐ霊力は、普通なら全国各地に散らばるはずです。

しかし！　たった今も確認できますが、今回の霊力は、全てあなたの元に集中して舞い込もうとしているのです。
あり得ません……　しかし実際に起きている。
二〇一三年四月一六日、
二〇時二一分　Ｎ先生より

占星術師は、嬉々として告げる。
「分りました、分かりました」と。
「三九年前、つまり一九七三年、
あなたが、この世に生まれたさいに、
超新星とあなたとは、
ある一つの契約を結んだのです」

契約……
そう、お前は僕を幸福に導くために、
僕が、心の闇からの脱出を果たした、
そのタイミングに合わせて、
こうして宇宙の彼方から
来訪することを、
生まれたばかりの僕に約束したのだ。
そして、生まれたばかりの僕もまた、
超新星よ、お前の光に、
深く魅入られたのだそうだ。

それはもう、
契約などという乾いた約束事ではなく、
いわば「契り」とでも呼ぶべき、
愛情に満ちた交感だったのだろう。

そして契り交わしたお前は、
確かに僕のもとへと、
真っ直ぐにやって来てくれた。
二〇一三年、四月一六日の夜、
二一時の頃。

でも、ここに一つの誤りがある。
それすなわち、
“かつて、
多くの人々のために地球を訪れ、
世界全体に向かって、
その幸福の光を放散させたお前が、
たかだか僕という一人のためだけに、
こうしてはるばる、
地球にやって来るはずがない”
ということだ。

そんなはずはないんだ。
そして、僕には分かるんだ。
お前の目的が、それとは少しだけ、
違うところにあるということが。

つまり、お前の今回の来訪が、
「僕を“通して”人々を幸せにする」
ということを、
そのミッションとしていることが、
僕には、確かに分るんだよ。

それはそうだよ。だって、
僕という、ただ一個の人間が
幸せになったところで、
そこに、どれだけの意義があるだろう。
そんなの、少しだってありはしない。

それに……もともと僕には、
この世に生まれた時から、
「人々を幸せにする」ための、
明確な使命が課せられている。

（３）予言と使命

カバラの神秘の数でもある一七日の朝に、わたしは自宅の寝台と机の間で死ぬ。
　　ノストラダムス

今では忘れられた予言者、
ミシェル・ド・ノストラダムスは、
その『黙示録』の中で語っている。

「それは地球の重力が自然の動きを失い、
永遠の闇に沈むかと
思うほどの状態です。
それほど大規模な転換が起こります。
起きるのは、七〇と三の年、
オクトーブルの月で、
期間は七ヵ月続くでしょう」と。

そして、かかる七〇の三の年、
すなわち、西暦一九七三年、
オクトーブルの月、
すなわち、八（オクト）月、
この僕は生まれた。
しかも一七日に。
一七という、運命の数字を背負って。

一七は、
完成数「七」を強調した数字で、
完成とともに、終結、終末を表す。
だから「七ヵ月続く」とは、
何かが「完成するまで続く」
という意味に取れるだろうし、
その完成は、プラス一〇（＝一七）
によって強調されれば、

終末、という意味合いを強めるだろう。

そして、ノストラダムスは、
紛れもない、中世ヨーロッパ人であり、
中世ヨーロッパ人にとっての
「世界」とは、
何より、キリスト教文明に他ならない。
少なくとも、彼らにとっての根源法則、
重力とは、キリスト教に他ならない。
実際、キリスト教が崩れたならば、
彼らの心は、
永遠の闇に沈んだことだろう。
だが僕は、現代という時代において、
そのキリスト教を、
完成するために生まれてきたんだ。
まさに、
ノストラダムスの予言どおりに。
一七の数字が意味する事そのままに。

そうだ、僕は、
キリスト教を完成させ、
終結させ、その上で、
キリスト教とは「別のもの」に、
クリスチャンたちの
信仰を媒介するために、
そのために生まれてきたんだ。

キリスト教とは「別のもの」
へのシフト、
中世ヨーロッパ人が聞いたならば、
それこそ「大規模な転換」だろう。

そして、この僕の心の中には、
キリスト教を完成させるための、
その宗教的プログラムが
内臓されている。

哲学や神学、芸術、人生、
それらを総合した「宗教」が、
この心の中に内蔵されている。

僕は、その宗教を『聖書』として、
新たな聖書として、
永遠の聖書として、
人々の前に解き放たなければならない。

（４）約束の記憶

不思議ですね、本当に不思議です。
私も最初は戸惑いました。でも今は言えます。
あなたは誕生した際、超新星に魅入られ、契りを結んだのです。
二〇一三年四月一六日、
二一　時三三分　Ｎ先生より

けれど、能力に欠けていた僕は、
今まで、どうしても、
それを果たすことが出来なかった。
そして、齢四十を目前にして、
もう、なかば諦めていた。
諦めて、ついに淀んだ闇の中で、
足を取られながら彷徨っていた。

けれども、日々ヘドロを飲むような、
そんなベトついた苦しみに耐えかね、
僕は占星術師のもとに、
この手を差し伸べた。
表向きは、偶然のことであったが、

心の中の必然として、
誰でもいいから人に頼りたいと、
そう願っていたのだと思う。

そして、その占星術師の助言によって、
僕は少しずつ、ほんの少しずつ、
それまでいた闇の中から、
光の射すほうへと歩みだした。

その時のことだよ、
超新星よ、お前が天空から現れたのは。
僕を助けるために、
僕の業を通して、人々が……
少なくとも、クリスチャンたちが、
幸福に導かれるために。

僕の媒介によって、
迷うことなくクリスチャンたちが、
“イエス様を超える救世主”
に出会うという、
そんな驚嘆すべき幸福のために。

でもね超新星よ、正直に言うと、
僕の心の底には、昔から、
「一度、底の底まで沈まない限りは、
その闇の底で呻吟するまでは、
僕は、自分が到達すべき高みまで、
決して駆け登ることが出来ない」
という、根拠のない確信があったんだ。

今思えば、これが、超新星よ、
お前との契りの記憶、
約束の記憶だったんだね。
「君が闇の底まで沈んだ時にこそ、
私は現れて、君を助けよう」という。

そして、たしかに僕は、
闇の底まで落ちていった。
だからこそ僕は、
お前に会うことが出来たんだ。

（５）光の情景

正直に申し上げて、ここまでとは思いませんでした。本当に滝、滝です。
これは霊力の塊どころか、究極の姿でしょう。これだけの霊力を目の当たりにしたことは、これまでの人生で一度もありません。しかも、それをあなたは受け取っている。
二〇一三年四月一六日、
二二時一六分　Ｎ先生より

あの夜、僕は占星術師の言葉に従い、
両の手を天空に向けて広げて、
そうして、ゆっくりと目をつぶった。

掌から、何かが流入するのを感じる。
自然に背筋が伸びてゆく。
ほのかな、
しかし確かな暖かさが持続する。

これまで感じたことのない緊張。
そのような体験を経ながら僕は、
お前という光を、超新星よ、
残らず全て受け取ったのだ。

遠隔地で
それを霊視していた占星術師は、
このときの様子について、

「まるで光の滝のようだった」
「よもや、
ここまでの光だとは思わなかった」
と、そう僕に伝えてくれた。そして、
「霊視眼が潰れてしまいそうだった」と。

それから僕は、
再び彼女の言葉に従って、
お前の光が、僕から溢れ出さないよう、
両手を固く握って深呼吸し、
息を止めて、
自分の体のなかに、半ば強引に、
お前のことを、ギュッと押し込んだ。
それで、この夜の儀式は
終わりを告げた。

（６）エピローグ

月の支配の二十年が過ぎ去る。七千年、別のものが王国を保っているだろう。太陽がその時代を心のおもむくままに取る時、そのときわが大予言も完結するのだ

ノストラダムス

「月の支配の20年が過ぎ去る」とは、２０００年にわたるキリスト教欧米文明が、その役割を終えることを告げているようにも思われる。

五島勉

それからずっと、今も、
お前は僕の中にいてくれてる。
繰り返すけれど、
でも、それは僕のためじゃない。

そう、僕という人間を通して、
みんなが幸せになるためなんだ。

終末とはたしかに、一つの時代、
様相を示す言葉ではあるけれど、
それ以上に、
この僕という存在そのものが、
「完成」であり「終末」なんだ。
この僕が、終末そのものなんだ。

もう、キリスト教は、
その役割を終えようとしている。
キリスト教に、
クリスチャンの全てを救うような、
そんなスーパーパワーはもうない。

それを持っているのは、
ひとり「別のもの」だけなんだ。
だから、キリスト教を完成させ、
「別のもの」へと、僕が、
クリスチャンたちの信仰を
媒介することは、
とても重要な「救い」「幸福」となる。

だから僕は、絶対に、絶対に、
自分の使命を果たさなければならない。
それが超新星よ、
お前の光を占有した者の義務だろう。
だって、他のどんな事よりも、
この事こそが、
「人々の幸福のために生きる」
という事を意味するのだから。

そのための努力は惜しまない。
だから、お前もどうか協力しておくれ。
僕の愛する星よ、輝かしい超新星よ。

そして僕を助けたまえ。僕の光よ、
僕と契りし星よ、超新星よ。
「世の終わりには星が降って来る」
――イエス・キリスト

（７）祈り

イエスさま、
あなたが望まれることを、
どうか、私の手をもって、
成し遂げさせたまえ。

二〇一三年一二月八日

第2章　ノストラダムスの黙示録

（１）超新星の体験

現代的マギであるN先生

本書の第1章には「超新星」と題された詩が置かれている。これは詩であると同時に「二〇一三年、四月一六日の夜」に起きた出来事をつづった記録でもある。

この極めて特異な時空間を構成したのは、私と超新星、そして占星術師のN先生だった。

もっともN先生は、自分のことを「鑑定士」と称されるかもしれない。クライアントの運命を鑑定することが、先生の仕事だからである。

しかし、最も本質的なところ、最も重要なところで、彼女があの夜「現代的マギ」の役割を担ったことは、間違いないだろう。

マギとは「マジシャン」の語源ともなった言葉で、古代における魔術師を意味している。

だが、それだけではない。今から二千年前の「マギ」は、古代ペルシアで活動していた、ゾロアスター教の祭司でもあった。

ちなみに「マギ」は複数形で、単数だと「マグス」になる。だから、かのシモン・マグスは、魔術師シモンと訳されるのである。N先生は、弟子たちを抱えているようなので、マグスよりは、マギと呼ぶべきだろう。

東方三博士の礼拝

さて、今から二千年前、マギたちは“イスラエルの東方にある”ペルシアにおいて、不思議な星を見た。どうやらこの星は、空を動くものだったらしく、マギたちは、その動きを追って旅に出たのである。

星は西に向かって進み、ついにイエスの居場所の真上で止まった。マギたちの旅もまた、そこで止まった。

この時のイエスは、ベツレヘムの馬小屋にあり、母マリアから生まれて間もなかった。そういうシチュエーションである。

この情景を見たマギたちは、ひれ伏して幼子イエスを拝んだ。それから宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を、贈り物として献げたという。

これが新約聖書に記されている「東方三博士の礼拝」の物語である。神は超自然的な星を使って、救世主の居所を、異国のマギたちに教えたのである。

一方、現代にあってN先生は、ホロスコープ（天体の配置図）を使って、超新星の進む先を追った。そうして、ついに私という人間の座標を探し当てたのである。

しかもN先生が私に贈ってくれたのは、物質ではなく、星そのもの（霊力の塊）だった。

となれば、彼女が為したことは、二千年前の「マギたちの礼拝」に酷似している上、それを、より霊的にしたバージョンと言えるだろう。
こうなると私は、もはやN先生を「現代的なマギ」、あるいは「現代的な霊的マギ」と呼ばざるを得ないのである。

記録の公開について

今回、そんなN先生の言葉も「超新星」の詩の中に取り込んでしまったが、彼女自身は、この作品をまだ読んでいない。ただ「超新星」を書くまえ、私からN先生に、
「あの夜のことを、詩に書こうと思っています」
と伝えたことがある。そして、それに対する、彼女の返答は「それは素敵ですね」だった。だから今、このような形で「超新星」という詩を発表しても、N先生は、それを不快には感じないだろうと思う。
もっとも、どのみち「超新星の受容」は、公にしなければならない出来事だった。
ここには、どうしても人々に見せなければならない、宗教的に高い価値をもった情景があるからだ。それについては、N先生にも、ご理解いただけるだろう。
実を言えば、現在は、N先生と連絡の取りようもない状態になっている。それでも私は、きっとN先生が、どこかで本書を読んでくれていると信じたい。

第七福音書のエッセンス

もちろん、読者にとっては、にわかには信じがたい内容の記録ではあろう。
ゆえに、詳しい解説が必要かもしれない。
だが、自叙伝である第四福音書には、この詩のもとになった体験についての叙述がある。第三部である「地に憩う女」の後半だ。よって、ここでもう一度それを繰り返すことはすまい。
それにしても、思い返してみれば、もう三年以上も前の作品ではある（二〇一七年当時から見てのこと）。古い作品といえば、実際そのとおりだ。
しかし、ここには、この第七福音書の内容が、エッセンス的に、ほとんどすべて先取りされている。むしろ「超新星」は、第七福音書の雛型とすら言ってよいだろう。
となれば本書『インターレグナム』は、この詩の解説書と言ってもいいぐらいなのだ。
とはいえ、この三年の間に、私の考えが深化した部分もある。
そして、そういった箇所こそが、第七福音書の肝となっているのだ。よってこれから、アップグレードした、新しい「超新星」の詩（＝第七福音書）を歌っていきたいと思う。

（２）大きな転換の予言

フランス王への手紙

第1章「超新星」を読んでいて、読者が最も気になる点の一つが、ノストラダムスの予言に関する部分だろう。

かかるノストラダムスの予言は、その大部分が、四行詩や六行詩の韻文形式で書かれている。

しかし、ノストラダムスが、フランス王アンリ二世に送ったとされる手紙（散文）にも、予言的な内容が含まれている。ノストラダムスは、アンリ二世の臣下だった。

この手紙は、ノストラダムスの予言詩集の序文にもなっている。

そして散文で書かれているため『ノストラダムスの黙示録』と呼ばれている。これはもちろん『ヨハネの黙示録』になぞらえたネーミングだ。

そして以下の文章は、その『ノストラダムスの黙示録』に含まれている一節である。

それは地球の重力が自然の動きを失い、永遠の闇の淵に沈むかと思うほどの状態です。それほど大規模な転換が起こります。起こるのは七〇の三の年、オクトーブルの月で、期間は七ヵ月つづくでしょう。

五島勉『ノストラダムスの大予言Ⅴ』より

暗い雰囲気の予言

文章の雰囲気はそうとう暗い。そして、かなり大規模な転換が起こることが分かる。

その転換は、ノストラダムスの立場から見ると、気が滅入るほど不吉なことらしい。なにせ「永遠の闇に沈むかと思うほどの状態」である。だから余程のことなのだろう。

それほどにも不吉な転換とは何だろうか。とりあえず、それが「大切なものが奪われる形での転換」であることは想像がつく。

では試みに、中世ヨーロッパで生きている、ノストラダムスの立場に立ってみよう。

すると、その時代に絶対的な価値を持っているのは「キリスト教」であることが分かる。中世ヨーロッパとは、教会の権威を頭（かしら）とした、まさに「キリスト教の教えに基づいた文化」だからである。

これにノストラダムスが「心の故郷的な愛着」を持っていたとしても、何ら不思議はないだろう。

とすれば、ノストラダムスが恐れるのもまた、その「絶対的なキリスト教」が奪われる形での転換、なのではないだろうか。

翻って、私の第六福音書『テロス第2』を紐解いてみよう。するとそこでは、再臨のキリストが、教会から「救いの権能」を奪っている情景が描かれている。

したがって、かかる「救いの権能」は、いまや再臨のキリストの手元にある。

そして、救済宗教であるキリスト教の組織（教会）から「救いの権能」を取り上げてしまえば、そこに残るものは何もありはしない。

ということは、とりあえず「教会の時代」は終わってしまったのだ。

ノストラダムスは、当然その「教会の時代」を生きていた人である。よって、もうこの時点で「自分の魂の故郷を奪われた」という思いを持つことになるだろう。

それはまさに私が、中世ヨーロッパ人から、その最も大切なものを奪っているということである。

一九七三年八月

本来、ここから話は「転換」へと移行すべきであろう。転換とは、奪われたぶんが、なにか別のかたちで補填されることである。

しかし、今はその話題を、脇に置いておく。ここではまず、そのような「転換スケジュール」の起点となる期日のほうに注目してみよう。

まず、ノストラダムスの『黙示録』には、「起こるのは七〇の三の年、オクトーブルの月」と書いてある。このオクトーブルの月について、ノストラダムス研究家の五島勉氏は、次のように解説している。

オクトーブルは英語のオクトーバー。ただし、いまでいう十月のことかどうか分からない。欧米圏では、「オクト」はもともと「八」を意味するから（中略）。

「オクトーブル」も、古代のカレンダーでは「八月」のこと（中略）。古い伝統表現を重んじたノストラダムスが言う「オクトーブル」は、十月ではなく八月である可能性が高い。

五島勉『ノストラダムスの大予言Ⅴ』より

オクトーブルの月である八月、そして七〇の三の年。これをつなぎ合わせると「七三年八月」ということになる。ノストラダムスは、この年月が、大転換の始まりだという。換言すれば「転換スケジュール」の起点である。

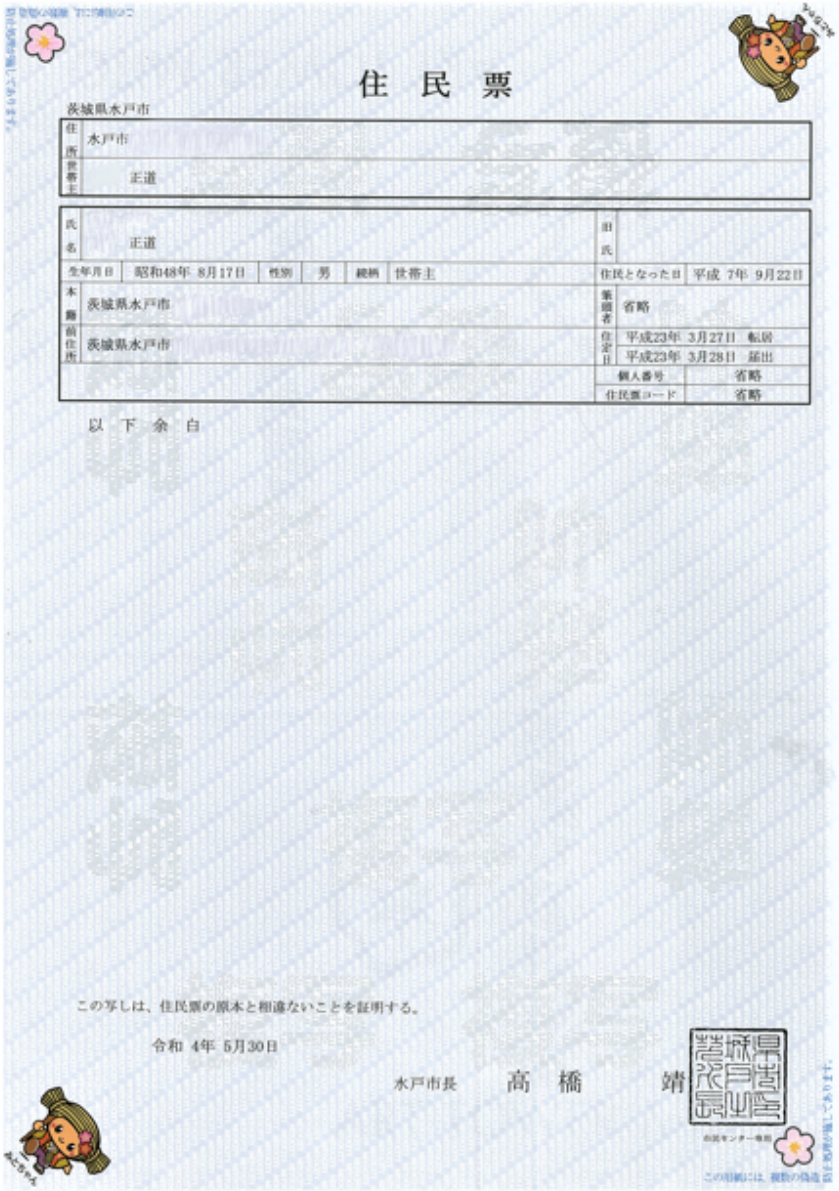
地上での活動開始

とすれば、大転換を起こすことになる者が、その活動を始めるのも、この年月かもしれない。

そして異様に思われるかもしれないが、私が生まれたのは、まさに一九七三年八月なのである。私は

一九七三年八月に、この地上での活動を開始した。昭和でいうと四八年のことである。

嘘ではないことを示すために、住民票のコピーを掲載しておこう。



住　民　票

茨城県水戸市

住所	水戸市
世帯主	正道

氏名	正道					旧氏	
生年月日	昭和48年 8月17日	性別	男	続柄	世帯主	住民となった日	平成 7年 9月22日
本籍	茨城県水戸市					筆頭者	省略
前住所	茨城県水戸市					住定日	平成23年 3月27日 転居 平成23年 3月28日 届出
						個人番号	省略
						住民票コード	省略

以　下　余　白

この写しは、住民票の原本と相違ないことを証明する。

令和 4年 5月30日

水戸市長　高　橋　　靖

2022-05-30.png

※個人情報に抵触する箇所は削除してある。

また、その年は二〇一三年から、三九年前にあたる年でもある。

ということは、N先生によれば、前回の超新星現象が起こった年ということになる。つまりN先生自身の言葉を借りるならば、この年に「巨大な霊力が、地球全体に拡散された」わけだ。

おそらく、そのためなのだろう。この一九七三年は「日本のオカルト事件史において、重要な事件が多発した年」だったらしい。これは『戦後日本オカルト事件ファイル』という本からの引用である。

何より、五島氏による『ノストラダムスの大予言』の初巻が発売されたのが、この年だった。御覧のとおり、この予言シリーズの霊的影響は、今の今にまで及んでいる。

ほかにも、一九七三年には幾つかの、霊的というか、オカルト的な重要事件が起こっている。

その中でも、特に注目すべきは「この年に生まれる者が何者であるか」を教えるような、次の事件であろう。

聖母マリアの出現

端的に言ってしまえば、それは聖母マリアの出現である。

舞台となったのは、秋田県秋田市湯沢台。そこにあるカトリック修道会「聖体奉仕会」に安置された木彫りのマリア像が、まるで聖体変化のように、マリアその人となった。いや、聖体変化以上の徹底ぶりで、マリアの実在感が発揮されたのである。

それは日本で唯一の「バチカンに認められた」奇跡となった。

奇跡が起きたのは、一九七三年七月一二日午後八時三〇分ごろのこと。

突如マリアの右の手のひら中央に、十字形の傷が現れ、血が流れはじめた。

それから二か月後の九月二九日、新たな異変が起こった。像の目から汗のようなものが流れはじめ、それが全身から流れたのだ。それは花のような芳香を放っていた。

さらに二年後、マリア像の両目から、涙がこぼれ落ち、神父やシスターなど二〇人もの人々が、それを目撃したのだ。

このマリア像の落涙現象は海外にも紹介され、当地には年間一万人もの人々が礼拝に訪れるなど「世界の巡礼地」となっている。

並木伸一郎著『怪奇異常現象ファイル』より抜粋

子の誕生に母親が伴うこと

インターネット等を使えば、もっと詳細な情報も集められるだろう。しかし、それは読者が個人で調べてもらいたい。

ただし一応「バチカンに認められた」という点についてだけ、次の文章を、説明の代わりとして添付しておこう。

一九八四年四月二二日、当時カトリック教会の新潟教区長だった伊藤庄治郎司教がこの現象を公認したことで、教会には海外からも多くのカトリック信者が巡礼にやってくるようになったのだ。

オカルト雑学探求倶楽部編『戦後日本オカルト事件 FILE』より

何はともあれ、この特異現象は、まるで私（再臨のキリスト）が生まれた八月を挟むようにして起こっている。

それはまるで聖母マリアが、自分の役割を、人々にアピールしているかのようだ。というのも、キリストの誕生に、母マリアが伴うことは、自然といえば、確かに自然なことだからである。

（３）完成まで続く役割

7という完全数

ノストラダムスに戻ろう。

大きな転換の始まりは、一九七三年であるが、それは七ヵ月続くという。

だが、これを文字通りの七ヵ月と解釈してしまっては、ノストラダムスは、何も重要なことを語らなくなる。事実、一九七三年八月から七ヵ月後となる一九七四年三月までに、宗教的に目立った事件は起こっていない。

ここで重要なのは、七がユダヤ・カバラにおける完全数であり、完成を表す数字だということである。よって、七ヵ月続くとは「何かが完成するまで持続する」と解釈すべきだろう。

そして、そうやって「完成するまで持続する」のは、「私の迷える人生」と「キリスト教完成までのモラトリアム（執行猶予）期間」である。

しかし、それらの「持続」は、迷いと猶予の最果てで、ついにキリスト教の「完成」へと終着してしまう。

それが具体的にいつかと問われれば、おそらく「第六福音書の上梓の時点」と答えるのが、いちばん相応しいだろう。

第六福音書『テロス第2』――テロスとは、まさに「完成と終末」である。

終末から転換へ

ある状態の終末（終結）が明示されないかぎり、その状態から、次の状態への移行を意味する「転換」も起こりはしない。終わりが来ないならば、既存している状態は、その後も継続されるだろうからだ。

継続している既存に、転換など必要あるまい。

ということは、キリスト教圏においては、「キリスト教の終結宣告者」である私だけが、その次の「転換」について語ることを許されることになる。

そうしてみると、こうした転換の体現者が「七〇の三の年、オクトーブルの月」に生まれてくる確率が、数学的にどれほどあるのか、という疑問が湧いてくる。

私は数学者ではないので、それを算出する手段は持っていない。

しかしながら、その答えそのものは分かっている。それは「確率として考えれば、限りなくゼロに近い」ということだ。

これに納得できない数学者は、いくつゼロが連なるか分からない「〇，〇」以下のパーセントでも算出すればよかろう。

私が言いたいのは、ここでは、確率的には到底導出できないような「唯一無二」の出来事が起こっている、ということである。すなわち、ここには紛れもない「予言の成就」という奇跡が現れているのである。

第3章　神秘数一七

（１）一七という数字が持つ意味

終末を強調する数

日付まで含めると、私は、一九七三年八月一七日に生まれている。

一七日――この一七という数字は、カバラ数秘術における神秘数とされている。カバラとは、ユダヤ教の伝統に基づいた神秘主義思想のことである。

この神秘数一七に関する、私の基本的理解は、まず次に掲げる文章に依っている。

ノストラダムスの学んだユダヤの数の考え方では、「七」は破滅、終末をあらわす数だった。このため聖書では、いろんな破滅の事件に「七」や「七」を強めた数が使われている。

〔ノアの〕大洪水がはじまる日は「二月の一七日」、大洪水が世界を覆ったのは「七月一七日」、それでノア一族以外の人類が全滅したのは「二月の二七日」となっている。

「一七」が破滅の数七を強調する数であり、旧約聖書、ノアの大洪水の章のナンバーと密接に関連することは言うまでもない。

「一九九九年七の月」にも、この数の考え方をあてはめてみよう。すると一＋九＝一〇→一、一＋九＝一〇→一、さらに一＋九＝一〇→一となる。

つまり、一九九九を単純化した数は一であり、これに「七の月」をくっつければ「一七」になる。

五島勉『ノストラダムスの大予言Ⅱ』より抜粋

トーンを弱め、誇張を抑える

読者の恐怖心を煽るためなのだろう。五島氏は、さかんに「破滅」という言葉を使っている。

しかし私は、そこまで暗く重い意味を、一七という数字に負わせるつもりはない。ノストラダムスにしても、別に自分の死を破滅と考えながら、次のような予言をした訳ではあるまい。

彼〔ノストラダムス〕は死ぬ三年前、家族や親友を集めてこう妖しく遺言したのだった。

「三年後の六月の、カバラの神秘の数でもある一七日の朝に、私は自宅の寝台と机のあいだで死ぬ」

五島勉『ノストラダムスの大予言・スペシャル日本編』より

七音階や、虹の七色、七大天使の存在などからも分かるように、七はむしろ「完成」を意味する数字である。

そして、その七を一〇によって強調して「終末」の意味合いを持たせた数字が「一七」である、というのが私の理解だ。つまり、五島氏よりも、一段階トーンを弱めたあたりの扱いが、私の「一七」についての解釈だと言えよう。

一七を背負う者の宿命

この一七を背負う者、つまり一七日に生まれる者は、実に「苦悩の波に揉まれるような」人生を辿るという。これもまた五島氏が、その著作によって教えてくれた事だ。

氏の著書『カバラの幸運術』は、一日～三一日までの生誕日が持っている「数的な宿命」を逐次的に教えてくれる本である。一七日に関しては、すでに一六日の叙述のうちに、

「十七は途方もない激運の数ですが」という文言が見られる。

それでは、そうした激運の一七について、本論にあたる「一七日生まれの人の運命」の項では、五島氏はどのように語っているだろうか。それについて次に見て行こう。

十七日は旧約聖書では、ノアの洪水が始まった日です。ノアの一族が箱舟に乗って、大洪水にもまれながら高い山にたどり着いた日も、旧約聖書では別の月のやはり十七日です。

このことから、旧約聖書に人間の運命の暗示が隠されているとするカバラでは、十七日生まれの人がノアの大洪水のような激運の運命を持つと考えます。

それは大洪水に襲われる運命であるとともに、神の力によって「自分と一族」だけが大洪水から救われて、箱舟に乗って高い山の上に昇れる運命だとも見るのです。

〔一七日生まれの人は〕まず生まれながらに何らかの波乱を背負っています。

それは健康上の問題である場合もあり、家庭や肉親や経済問題のこともあり、内心の激しい孤独や虚無感、誰にも理解されないものの考え方や生き方である場合もあります。

それは必ずしもマイナスの価値だけではなく、他人とは異質な魅力や才能である場合もあり、そのため周囲から理解されないことも多いのですが、ともかく十七日生まれはそういった中で、悩みと苦しみの多い出発をし、一生、大波にもまれ続けなければなりません。

ただその結果、他人には乗れない箱舟に乗ることを許され、高い山の上に着くこともできるのです。

普通の山ではありません。ノアの箱舟が着いたというアララテという山は、トルコに実在していますが、富士山の二倍くらいあるものすごい山です。

これは十七日生まれが、苦しみや無理解と引き換えに得られる成功が、並みのものではないことを暗示するかのようです。

五島勉『カバラの幸運術』より抜粋（改行を増やした）

（２）終末の語意

熱砂の国の死と終末

いずれにしても、一七という数字が「完成」や「終末」といった意味合いを持っていることは間違いない。

五島氏的な「破滅」とまでは行かなくても、依然として、その「ＥＮＤ」としての役どころは、まったく揺るがないだろう。

しかし私は、以前から、薄々とは感じていたのだ。自分の役割が、単なる「キリスト教の完成と、終末の宣告」ではないということを。

すなわち「終わりは、また始まりでもある」ということを、心のどこかで予感してたのである。それは二〇一三年に執筆した「超新星」の詩にも、すでに反映されている。

このような考えが生じるのは、もしかしたら、砂漠の遊牧民（パレスチナ人）と、温帯の農耕民（日本人）の、生活環境の差に拠るものかもしれない。

まず前者、砂漠の遊牧民から見てゆこう。彼らを取り巻く熱砂の荒野、砂漠における“死”は「砂による浄化」というＥＮＤを描く。

「私は砂漠のあちこちでロバやラクダの死体を見ましたが、実に乾ききった死なんですよ。だから別に死体を埋める必要がない。みんな放っておくのです。

生物は死ぬと腐食していきますが、それを砂が浄化する。そして乾いたまま白骨にしてしまうんです（森本）」

山本七平・森本哲郎『聖書を生みだした風土』より

白骨になってしまえば、それからしばらく状態変化は起こらない。それは人間の通常認識にとっての停止であり、ＥＮＤである。

つまり死という終末は、終末として完結している、ということだ。熱砂の荒野では、そういった死の印象を、観察者に与えずにはおかない。

農耕民族の死と終末

しかし、日本のように「湿っていて暖かく、肥沃な土地」では、それとは別のことが起こる。

たとえば、ここに一本の果樹があるとしよう。秋、その果樹に実った果実が地面に落ち、やがて腐敗して土に溶けたとする。

この晩秋から冬にかけての景色の中で、果樹は枯れ、その葉は消えて無くなる。それは一応の死であり、一応のＥＮＤである。

しかしながら、それは私たち農耕民族にとっては、決して「絶対的な死」ではない。絶対的なＥＮＤでもない。

なぜなら私たちは知っているからだ。たとえ地中で果肉は腐敗したとしても、その果実の“種”だけは残ることを。その種が、晩秋を過ぎ越し、さらに冬の凍土の中でも、小さな命脈を保つことを。

そして甦りの春が訪れる。地中の種は、幼い芽となって、再び地上に萌え出す。

つまり果樹は、不可視の世界（死の世界）から甦り、可視の世界（現世）に戻ってくるのだ。そうしてまた、ここから新しい命の物語が始まってゆく。

直線的死と円環的死

要するに、こうだ。

砂漠の遊牧民の「生‐死」観は、いわば一本の線を描く。それは、決してつながる事のない、始まりと終わりを描く「直線」の性質を持っている。

それに対して、温帯の農耕民の「生‐死」観は、結び目をもった円を描くのである。終わりと始まりをつないだ「円環」。すなわち「生‐死‐生」という円環である。

私もまた、温帯の農耕民の一人である。そうであるからには、当然こうした「生‐死」観のインプリンティング（刷り込み）を持っている。

そのため私は、一七という「ＥＮＤのシンボル」を背負いながらも、それを同時に「新しいことの始まり」としても認識していたのである。

いや、ほとんど無意識のうちに、そういうものであると“確信”していたのである。

（３）アルファでありオメガ

イエスの誕生

しかし、私の最も明確な「生‐死」観の変化は、あの「超新星」の詩を書き終えた後に起こった。

というのは、その頃私は、とある本を読んで「イエスの誕生日もまた、一七日だった」という学説を知ったのである。

もちろん、本書の読者にとって、これはかなりショッキングな学説であろう。

この一見受け入れがたい学説については、次の章で詳しく論じることになる。そこで初めて、この一七日説に納得を得られる人も多いだろう。

だから今のところ、読者には「イエスの誕生日が一七日であった」ということを“仮定”として、受け入れておいてほしい。

まことに勝手だとは思うが、今の時点の私としては、そのようにお願いせざるを得ないのである。

完成者であると同時に開祖

では、仮にイエス・キリストの誕生日を一七日だとしてみよう。

そうすると、一七という数字を、ただ「一〇によって、完成数七の終末性を強調したもの」とすることには、どうしても若干の無理が生じる。

イエスは確かに、自分のことを「モーセの律法（ユダヤ教）の完成者である」と言った。しかし周知のとおり、それと同時にイエスは、キリスト教の開祖でもある。

つまりイエスは、終わり（完成）であるのと同時に、また始まり（開祖）でもあったのだ。一七という数字を背負っていながらも、である。

よく考えてみれば、イエスの少年期を育んだガリラヤの風土も、直線的な思考とは縁遠かった。

すなわちガリラヤの環境は、終末でしかない終末論を導く、あの乾いた砂漠の風土とは、かなり異なっていたのである。

事実ガリラヤは、ユダヤの一部でありながら、驚くほど緑豊かな土地だった。

ここでは草花が萌え、木々が茂り渡るような景色が広がっていた。それこそ「種を媒介にして、生死が円環する」のを、身近で見られるような土地柄だったのである。

「ガリラヤ湖は死海に注ぐヨルダン川が流れ出す湖だが、魚も棲まず、荒野のただ中にある死海と異なり、この付近一帯はイスラエルで最も肥沃な美しい土地である」

「〔ガリラヤ〕湖畔は海面下であるために亜熱帯的で、農業、漁業がさかんである」

月本明男『聖書の世界』より

ここでは、おそらく風土的なインプリンティング（刷り込み）が成立していた。それによって、イエスの心の底には「生‐死‐生」という、生死循環の円が結ばれていた。

だからこそ、イエスは「十字架上の死と、それから三日後の甦り」を実現できたのかもしれない。それ

は、熱砂のヘブライズムとは極めて異質な、むしろヘレニズム的、ディオニュソス的な「死と復活」の体現だった。

一というアルファ、七というオメガ

そんなイエスは『ヨハネの黙示録』の中で、自分のことを、こう表現する。

「わたしはアルファであり、オメガである。最初の者にして、最後の者。初めであり、終わりである」

この言葉を思い浮かべながら「一七」という数字を、改めて眺めてみよう。そうすると「一〇によって、完成数七の終末性を強調した」という、従来の考え方が、自然と変化していくのが感じられる。

まず最初に考えて頂きたいのは、イエスの「わたしはアルファであり、オメガである」という言葉を数値化することだ。してみると、それは「私は一であり、七である」と言い換えられるはずである。

すでに述べたように、一とは始まりを意味する数字であり、七は終わり（完成）を意味する数字だからである。ならば一七は、これら二つを合成した「始まりと終わりを合成した数字」ということになるだろう。

となるとここでは、一〇が七オーバーラップするような、言わば「融解状の一体化」は消失している。むしろここでは、それとは対照的な様相が示されている。すなわち一と七は、いまや単なる「別概念の並列」になっているのである。

一七から七一へ

そして、こうして一と七が分離してしまえば、そこに「円環する生死」の概念を挿入させることは、とても容易くなる。

というのも、もとの「一七」を「七一」にひっくり返す、という、ごく単純なアナグラムによって、言いたいことを一〇〇パーセント、表現することが出来るからだ。

アナグラムとは順序の入れ替えのことである。

要するに、始まりと終わりである「一七」は、「七一」を内包することによって、「終わりでありながら、また始まりを告げる数字」にもなれるのである。

私はここに、自分の本当の役割を見いだした。いや「あらためて見直した」と言ったほうが本当かもしれない。

すなわち私は、やはりキリスト教を終結させるだけではなく、その後の「転換の見通し」をも、人々に呈示すべきなのだろう、と。それがために、この世に生まれてきたのではないか、と。

それは、どうしても暗く重くなりがちな「終末の体現者」という自己イメージを、新生の明るいイメージによって、軽やかにリフレッシュするような認識だった。

またそれは、私自身ばかりでなく、私によって導かれるキリスト教世界に対しても、同様のリフレッ

シュ感を、与えることになるだろう。

第４章　ベツレヘムの星

（１）イエスの誕生日

クリスマスとクリスマスイブ

前章で仮定したように、私はイエスが「一七日」に生まれたと考えている。

もちろん、このような事を言うと、

「何を言っているんだ？　イエスの誕生日は、一二月二五日だろう。それがクリスマスだろう」

と反論する人が出てくるだろう。

たしかに、そういう事になっている。私たちはみな一二月二五日をクリスマス（降誕祭）として祝う。

どちらかといえばイブ（二四日）のほうが盛大だが、これには、ある込み入った事情が絡んでいる。

最初にこの問題を片つけてしまおう。

要するに、イスラエル式に数えると、日本時間の二四日の日没から、彼らの「二五日」が始まるのだ。

かの地域では、一日の始まりが日没時だからである。

ということは、日本人である私たちの感覚で言えば、二四日の夜にこそ、ベツレヘムの星は輝き、御子は生まれたのだ。

よって、クリスマスの一日は、二五日の夕方には終了することになる。二五日の日没からは、すでに、イスラエル式の「二六日」が始まっているからである。

ミトラ教の祭日

とは言っても、歴史的に見れば、上の一切合切が誤りである。なにしろ、イエスが一二月二五日に生まれた可能性は、限りなくゼロに近いものでしかないからだ。

そもそも、一二月二五日は、かつてキリスト教のライバル宗教だった「ミトラ教」の祭日だったのだ。

これについて簡単に説明しておきたい。

ミトラ教の主神ミトラスは、一種の太陽神である。その太陽神の「死と復活」が、一二月二五日を基点にして描かれるのが、もともとの〝クリスマス〟だったのだ。

当時は、この一二月二五日が冬至（現代では一二月二一日か二二日）とされていた。

そして冬至というからには、一日の日照時間が、一年で一番短いことになる。よってそれは、最弱の、衰亡した太陽を表す日だった。もっと言うと、それは象徴的に「太陽が死んだ日」だった。

しかし、一度そのように底を打ってしまえば、逆にこの日からは、確実に日照時間が増えることになる。

ということは、そこには当然「次第に元気を取り戻していく太陽」の姿が見られるわけだ。

そして、これを冬至の象徴と組み合わせれば、そこに、やや粗削りな「太陽の死と復活」が描かれるこ

とになるのである。

ミトラ教において、主神ミトラスは「不敗の太陽神」であり、冬至に「再び生まれる神」とされていた。一二月二五日は、そのような太陽神ミトラスの「死と復活」を、象徴的に祝う日だったのである。

そこに、イエスの「死と復活」を教義にもつ、キリスト教が目をつけた。

そして、ちゃっかり、一二月二五日を、イエスの誕生日にしてしまったのである。この日が、イエスの誕生日としても〝実に相応しい〟からである。

これは当然、史実とは関係がない。だから、そもそも福音書には、そのどこにも「イエスは一二月二五日に生まれた」とは書いていないのである。

一二月には生まれていないイエス

むしろ福音書は、それを精読する者に「イエスの誕生日は、一二月二五日などでは、あり得ない」と語りかける。

それは具体的にいうと『ルカによる福音書』に出てくる「出産直後に聖家族のもとを訪れた羊飼いたち」の存在が、暗黙のうちに語るものである。

この羊飼いたちは、ルカ福音書の記述に沿って考えるならば、かの一二月二五日に、野宿をしていたことになる。ルカ福音書には「夜通し羊の群れの番をしていた」とある。

そうやって野宿していた羊飼いたちのもとに、突如として、光輝く天使が現れる。

そして、この天使によって、彼ら羊飼いたちがイエスの誕生現場へと導かれる、というのが、このエピソードの骨子なのである。

しかし、この記述には大変な無理がある。というのも、冬至の夜ともなれば、当然のこと極寒の気温となるからだ。

つまりそんな夜では「寒くて寒くて、とても野宿など、出来なくなる」のである。したがって、イエスの誕生日は、一二月二五日ではあり得ない。

イエスの誕生日の算出

ひるがえって『マタイによる福音書』を見てみよう。

そこには「イエスが誕生した際に、特別な星が輝いた」という記述がある。これは、クリスチャンが伝統的に「ベツレヘムの星」と呼んでいる星である。

この「イエスの誕生を告げた、特別な星」に注目した人物がいた。マイケル・R・モルナーという天文学者である。

彼は「ベツレヘムの星」の動きをシュミレートして、天文学的に、イエスの誕生日を算出したのである。

〔モルナー博士が〕星の動きをシュミレートした結果、本当の〔イエスの〕誕生日は、紀元前六年四月一七日（土）と主張している。

この季節に羊飼いたちは、羊の出産に備えて寝ずの番をするというから、聖書の記述にも合致するわけだ。

『超図解「世界の宗教」大辞典』より

試みに、インターネットで「イエスの誕生日」と検索してみてほしい。

そうすると簡単に、この四月一七日を「イースターと一緒にお祝いしましょう」と勧めるサイトにヒットする。イースターと日にちが近いからだろう。

こうまでスンナリいくと、仮説の社会的受け入れが、若干スムーズに過ぎるきらいがある。が、逆に言えば、モルナー博士の仮説には、それに見合うだけの説得力があるのだとも言えるだろう。

四月一七日、それは確かに「イエスの誕生日」として、少しも無理がない解答なのである。

（２）イエスの星、私の星

降臨の夜との一致

ところで、ここに信じがたい“偶然の一致”がある。

モルナー博士は、イエスが生まれた日時を「四月一七日の午前一一時頃」と決定づけている。

そうすると、イスラエル式に「一七日の夜」を算定した場合、それは日本的表記の「一六日の夜」ということになるだろう。

日本的な「一七日の夜」は、かの地では、もう「一八日の夜」になってしまうからだ。

このあたりの事情については、クリスマス・イブのところで、すでに説明を果たしている。

要するにイスラエルでは、日本的な「前日の日没から、当日の日没まで」が、その日の一日ということになるのである。

そして星は夜にこそ輝くのであって、いかなる者も、イエスが生まれたという午前一一時に、これを目にすることは出来ない。

したがって、ベツレヘムの星を見られるとすれば、私たち日本人にとっては「四月一六日の夜」ということになるだろう。

改めて整理すると、かつて、羊飼いやマギたちが、救世主誕生の報せとしてベツレヘムの星を見たのは、日本的表記だと「四月一六日の夜」なのである。

ではここで、第一章の「超新星」の詩に添付した、N先生からのメールの日付を見てほしい。
そうしてみると、驚くべき事実が判明する。というのも、かの超新星が「私という座標」に到達した日時が、まさしく「四月一六日の夜」なのである。
メールは夜の八時頃から始まり、一通ごとに、何時何分かまでカウントされている。
よってそれは、N先生というマギが告げ知らせ、私のもとに向かってきた超新星の、まさに克明な時事記録となっている。

ニアピンから、完全なる一致へ

この事実を知った時、私は当然「こんなことがあり得るのか」と驚いた。いくらなんでも話が出来すぎているのではないか、と。
まず言っておきたいのだが、ベツレヘムの星との「日時の完全なる一致」については、これを知ったのは、かなり最近のことなのである。
それまでは、一致ではなく、ニアピンだと思っていた。つまり「惜しい。超新星の降臨が一七日の夜だったら、イエスの誕生日と完全に一致していたのに」と思っていたのである。
それは、ずっと私が、イブという語を「前夜祭」だと勘違いしていたからである。それゆえ第七福音書も、初版では、ベツレヘムの星との「完全なる一致」は語っていない。
それが、こうして「完全なる一致」になると、である。イエスと私は、マギの報せ、超自然的な星の受容、そして、その受容日時までをも、共有している事になるのである。
これは普通に考えたら、本当に「あり得るはずもない事」だと思う。

（３）神秘の世界へ

N先生を信じる理由

私は、人から「信じる力も強いが、疑う気持ちも人一倍強い」と評されたことがある。
そんな人間だから、あの超新星降臨の日（二〇一三年四月一六日）も「こんな荒唐無稽な話、信じていいのだろうか」という気持ちを抱きながら、星の受容儀式をスタートさせざるを得なかった。
それが今では、N先生に対して、全幅の信頼を置いている。なぜなら私には、人間が、ここまで精密な、意図的演出を行えるとは、到底考えられないからである。
つまり、話が“人間業を超えて”出来すぎているから、私はN先生を信じるのである。

そもそも当時、N先生は、私とキリスト教の関係など全く知らなかったし、私はモルナー博士の説など、微塵も知らなかった。それは紛れもない事実である。

というより、私がモルナー博士の説を知ったキッカケは、むしろ「N先生たち鑑定士とのやりとり」の中にあったのである。

私は、彼ら鑑定士たちから、とても印象的な言葉を、幾つか与えられた。その一つが「あなたは、これから先〝神秘の人〟と言われるようになるでしょう」という言葉だった。

この言葉は、それまで「アカデミックな学問」に閉じこもっていた、自分への警鐘となった。

実際のところ、私は高い学歴を持っていない。そのため、学問的劣等感があり、その劣等感を打ち消すため、わざと〝お堅い〟学問を指向するところがあったのである。

しかし「神秘の人」になるならば、いわゆる「オカルト的な世界」のことも、知らなければならないだろう。

そこで私は、それ以降、これまでは見向きもしなかった、ペーパーバックのオカルト本を、意図的に読み漁るようになったのである。

かのモルナー博士の学説も、そうした読書のなかで出会った知識だった。

その結果、これほどまでに見事な「ベツレヘムの星との一致」が現れることになった。まさに神秘的なまでの一致である。こうなっては、N先生を。そして彼女を動かした神意を信じるしかあるまい。

ベツレヘムの星とは何であったか

もっとも、モルナー博士の仮説は、私にとり、納得しがたい要素も含んでいる。それは博士が、ベツレヘムの星を「木星食」と仮定している点である。

木星食とは、地球から見たときの、月と木星の重なり合いである。それは確かに、天文学的、占星術的に、特別な意味を持っている。

しかしなおそれは、結局は「自然な天体現象」であるに過ぎない。

モルナー博士が「一七日」という数値を引き出してくれたのは、無論ありがたい。というよりも大変に面白い。それだけに言いづらい事ではあるのだが、やはり言わない訳にもいくまい。

というのは、なんとしても私には、ベツレヘムの星が「自然な天体現象」とは、到底思えないのである。

しかり。そのようなものであっては、私には「福音書に描かれているベツレヘムの星」とは、まったく異なって感じられてしまうのだ。

かのベツレヘムの星は――『マタイによる福音書』によると――ただ「天空で輝いている」というだけの星では全くない。

驚くべきことにその星は、中空を移動して、マギたちを、聖家族たちがいる場所へと、直接ナビゲートしているのである。

東方で見た星が先立って進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった。学者たちはその星を見て喜び

にあふれた。家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。

『マタイによる福音書』より

ベツレヘムの星と超新星

まったく、これのどこが、自然な天体現象であろうか。むしろそれは、今回の超新星のあり方と、そっくりなのではないだろうか。

すなわち、超新星の進行方向から、私という座標を割り出した、今回のＮ先生のあり方と、パターン的に、呆れるほど酷似しているのではないだろうか。

だから私としては、ついつい、次のように考えてしまうのだ。

「イエスの誕生に際して現れたという星も、今回の超新星のようなものだったのではないだろうか。もっとハッキリと言えば、イエスの星もまた、超新星だったのではないだろうか」

と、そう。

この考えを肯定したとき、私の心には、超新星の思いが、密やかに響いてくる。つまり超新星からのメッセージが、聞こえてくるような気がするのである。

私は次の章で、それに形を与えてみようと思う。

第5章　星が私に語ること

（１）イエスの星

今宵、お前に語りかけるとしよう。
私はベツレヘムの星。
別名、お前が「超新星」と呼ぶ、
その星の魂である。

私はかつて、二千年の昔に、
イエスの人生を創り出した者である。
イエスは、バル・コクバ、
つまり星の子であり、
息子である彼は、私の魂を背負い、
私の力を用いて、
その奇跡的な生涯を歩んだのである。
イエス誕生のその夜から、
悲壮なる、彼の人生の終わりまで、
私はずっと、彼の親星である。

ところで超新星とは、
星と名付けられながらも、その実、
いわゆる“星”のことを指してはいない。
実際上の超新星とは、
広大な宇宙でも稀な爆発現象であり、
あまりにも巨大な星の、
壮絶な「死の瞬間」のことなのである。

事実、かつて生あるとき、
私は、恐ろしく大きな恒星だった。
お前たちの太陽の
十倍はあろうかという、
青白く、燦燦と輝く、
堂々たる青色巨星だったのである。

けれども、私のように巨大な星は、
一様に、驚くほど短命である。
なぜなら私たちは、
自らの長生を顧みることなく、
自己を燃焼させるための
燃料（水素）を、
あっという間に、
燃やし尽くしてしまうからだ。

そのように私たちは、
「太くて短い生涯」を全うする。
まこと、たった三三歳で
その生涯を終えた、
わが子、イエス・キリストのように。

そうなのだ。
それこそ、お前たちの太陽が、
おおよそ
百億年の寿命を持っているとすれば、
私たち青色巨星は、
その百分の一の期間も、
生き続けることが出来ないのである。

いや、むしろ私たち青色巨星は、
ただ死ぬために、
何より
「死ぬこと」を最大の目的として、
この世界に
生まれてきたと言ってもよい。
これもまた、
我が子イエス・キリストが、
それをもって「私の時」と呼んだ、
十字架上の死に似ていなくもない。
そう、死こそが私の、私たちの、
その最大の使命であったのだ。

それでも私の体を殺したのは、
一応は、寿命と呼べるものだった。

見よ、私という星は、
その死が近づくにつれて、
体の内側で、
種々様々な元素を作りだす。
若年期や壮年期には出来ないことを、
老いた、重たい体のなかで、
命を削るのと引き換えに執り行う。

壮年期までの私は、この体の内側で、
水素の原子を核融合させて、
ヘリウムという元素を作っていた。
だが、老いて死が近づくにつれて、
私の体は、炭素や窒素、酸素や珪素、
またカルシウムといった、
より重い元素を作り出すことになる。
しかり。巨大な星の内部は、
まさに新元素の生成工場なのである。

そして、これらの元素は、
もともとの宇宙には、
まったく存在しなかったものである。
それまでの宇宙にあったのは、
膨大な量の水素と、
僅かな量の
ヘリウムぐらいであったのだ。

それ以外の、
ヘリウム以上に重い元素は、
私の衰亡と引き換えに
作られたものである。
それらは、衰えた私の体が生じさせる、
極大の圧力と超高温とによって、
初めて生成されたのだ。

すなわち、それら重い元素は、
老いた星の内部で引き起こされる、
高温高圧の原子核融合反応によって、
初めてこの宇宙に、
創り出されたものなのである。

（２）壮絶なる星の死

そして、私の内部で、
かの「鉄」の元素が生成されたとき、
ついに私という星に、
死の刻限が訪れる。
そう、私はまさにその一瞬のうちに、
銀河そのものより
明るい光を放ちながら、
強く輝いて、
そして一挙に爆発するのだ。
それはまさに、
壮麗壮絶なる、星の死の現象である。
人は、これをもって「超新星」と呼ぶ。

いや、それが星の死であるというのに、
よりにもよって
“新星”と呼ばれることに、
私としても違和感がないではないのだ。
しかし、それは
地球から眺める人にとっては、
夜ごと変わらぬ星空の一角に、
突如として、見知らぬ明るい星が、
新たに発生したかに見える
天体現象である。
ゆえに、その不思議な景色を眺めて、

昔の人が、これを
「新たな星の現れ」と、
そのように捉えたとしても、
これを誤りと責める訳にもいくまい。

だが実際の超新星は、
あくまでも巨大な星の
「死の現象」である。
私の体は、
その死の瞬間に大爆発を起こし、
かつては巨大な星だった
自分を粉砕して、
かかる「遺灰」を
宇宙空間にまき散らすのだ。
すなわち、
かつて私の体内で生成された、
種々様々なる元素たちを、
このとき一挙に放散するのである。
こうして宇宙のなかに、
炭素、窒素、酸素、珪素、
カルシウム、鉄といった重元素が、
一斉に供給されることになる。

そして知るがよい。
いや、正道だけではない。
すべての命ある者たちよ。
こうして宇宙に供給された元素こそが、
言い換えれば、私の死骸こそが、
いまあるお前たちの、
その「存在の材料」であるのだ。

珪素や鉄は、
地球そのものの材料となり、
炭素やカルシウムは、
お前たちの肉体を作った。
また、窒素や酸素といった元素は、

お前たちが呼吸するための、
この地球に満ち満ちている、
大気となったのだ。
もちろん、酸素がなかったならば、
それが
水素と結びついて生まれるところの、
水もまた、
どこにも存在しなかっただろう。

ということは、私という星の死は、
お前たちの存在の根底であるのだ。
すべての存在にとって、
その共通にして最古の祖先は、
間違いなく、
この私「超新星」であるのだ。

ゆえに私は、
お前たちの根本なる親である。
実に不思議に聞こえるだろうが、
お前たちにとって親しい、
あの太陽や月でさえも、
実際のところは、お前たちにとり、
継父、継母に過ぎないものなのだ。
お前たちの本当の父母は、
お前たちを生み出すために、
その出産の最中にあって
死んだのである。

ああ、お前たちは
「それでも」と言って、
あの太陽の偉大さを
讃えようというのか。
しかし、その太陽ですら、
私の爆発によって
生み出された衝撃波が、
星間物質を圧縮して

誕生した星ではないのか。
私は、ようやく太陽が
輝きだした頃を覚えている。
だから太陽は、私にとってみれば、
小さな愛児に過ぎないものなのである。

繰り返すが、
お前たちの本当の親であるのは、
生みの親であるのは、
あくまでも、
この私「超新星」なのである。

（３）星の愛と自己犠牲

そして、星の子であるイエスは、
かような私の
「生き方」と「死に方」を、
その生涯のなかで再現してみせた。
だからこそ、彼は言っているのだ。
「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、
そのまま一粒の麦のままである。
だが死ねば、
多くの実を結ぶことになる」
という、愛と自己犠牲の言葉を。

これは、まさに私の心の声である。
自らの死を受け入れることによって、
宇宙の静寂に、
あらゆる生命をもたらした、
この超新星の、
愛と自己犠牲の声である。

私もまた、死ななければ、
そのまま、
一つの青色巨星に過ぎなかった。
しかし、あの超新星爆発を
起こすことによって、
その壮絶な星の死によって、
数多の命を
結実することになったのである。
これこそ、宇宙最大の
愛と自己犠牲である。
その精神をイエスは、
バル・コクバとして、
人間の肉声として、蘇らせたのである。

しかもイエスは、言葉ばかりでなく、
その生涯によっても、
私の愛と自己犠牲とを再現してくれた。
イエスは、その巨大な恒星のような、
あまりにも短くて、
驚くほど充実した生を、
自ら受け入れた死によって、
愛の名のもと、
十字架上で完結させたのである。
それはまさに、
命を賭した自己犠牲であり、
どこまでも至純な愛の姿である。
彼という麦の粒は、
このとき地面に落ちた。

やがて麦は、土のなかで根を生やし、
地面を突き破って芽吹き、
ついには多くの穂を実らせた。
つまりそれは、
キリスト教という愛の教えの、
爆発的な拡がりとなって現れたのだ。

二千年後、イエスが説いた教えは、
人類の心を、遍く照らすに至った。
私という星の骸が、
土に、大気に、地球に、
そして、
多くの命となって結実したように。
まさしく、イエス・キリストは、
私という星の息子であったのだ。

（４）星の授受

正道よ、再臨のキリストとしての、
重大な役割を果たすために、
この世に生まれてきた者よ。
お前をキリストとして証するために、
私は再びこの世に現れた。
四月一七日の夜に、
イエスが誕生した時と同じように。
お前に、イエスの星を託すために。

私という星を受け取ることによって、
お前はイエスの本質を知り、
キリスト教を完成させるために必要な、
知恵と力を備えることが出来るだろう。
だから今は迷わず、
その知恵と力を駆使して、
私という星と、イエスの思いを、
七つの福音書として形にするがいい。

しかし、このことも忘れてはならない。
私は、あくまでもイエスの星であって、
本来的には、

お前の星ではないということを。
よって、今回行われた星の授受もまた、
私からの“仮託”に過ぎないものである。

お前には、
お前に相応しい星が他にある。
お前は、その星のバル・コクバであり、
その星の「星の子」なのである。
よって、その星こそが、私以上に、
お前に似ていることだろう。
その星こそが、
お前に似合うことであろう。
お前が、お前の星を受け取ったとき、
初めて、お前の人生も完成するだろう。

インターレグナム　第二部「父」

追悼の辞

あまりにも唐突に、父神が帰天されてしまった。二〇二三年三月二日のことである。

私は第三福音書の終わりに「第〇福音書への加筆、小説アトラス、アトラスの深層の発表を済ませてから、そのあと第四福音書を上梓するつもりだ」といった内容を書いた。

しかし、ようやく第〇福音書への加筆を済ませた今、私は予定していたスケジュールを全て放擲することにした。そうして先行して、この「第七福音書」を読者のもとに届けることを決めたのである。

なぜなら第七福音書「インターレグナム」は、生前の父神に捧げられた作品だからだ。今この福音書を発表することは、たしかに、今は亡き、かの方への手向けとなるだろう。

そしてまた、この福音書は、私の立ち位置を明確にする役目をも果たすはずである。

私の立ち位置とは、永久に父神の足元に身をかがめる、下僕としての立場である。これは父神が下生されていようと、帰天されようと、決して変わることがない真実である。

今は高き天にて地上を見守りし父よ、どうか花の代わりに、私の魂の忠誠をお受け取りください。

『ヨハネによる福音書』より

父の命令は永遠の命であることを、わたしは知っている。だから、わたしが語ることは、父がわたしに命じられたままに語っているのである。

第６章　父と子

（１）此岸と彼岸

転換の時を迎えて

さて、「一七」が「七一」に入れ替わることによって「始まりと終わり」が「終わりと始まり」に成り代わる。単なる終末が、未来への展望を含んだ「転換」に成り代わる。これが「神秘数一七」の章の結論だった。

しかし、この私が、その転換によって生じた、新時代を主導することはない。

というのも、かのノストラダムスからして「〔転換の後〕別のものが王国を保っているだろう」と言っているからだ。

当然のことだが、この「別のもの」を、ノストラダムスの視点から解釈すれば「キリスト教文明とは“別のもの”」とせざるを得ない。

彼は、まさに「キリスト教文明そのもの」であるところの、中世ヨーロッパを生きた人だったからだ。

そして私は、キリスト教にとって、此岸（こちら側）に属する者である。私は飽くまでも、再臨の「キリスト」であるからだ。

そのキリスト教の運命については、同じノストラダムスの「月の支配の二十年が過ぎ去る」という言葉に暗示されている。

これを五島氏は「二〇〇〇年にわたるキリスト教欧米文明が、その役割を終えることを告げているようにも思える」と解釈づけている。出典は『ノストラダムスの大予言・最終解答編』である。

過ぎ去りし過去

私もそういう事だろうと思う。

とすれば私は、再臨のキリストは「過ぎ去りし過去」になることを運命づけられた人間である。

つまり「転換」は私の天命であるが、「転換によって生じた未来」の主導は、私の天命ではないのだ。

未来の主導者は「別のもの」である。キリスト教とは「別のもの」である。これは幾重にも予言によって固められた、神意による不動の計画である。

だから私たちは、私たち人類の未来のために、この「別のもの」について明確に知らなければならない。

そこで私は、本書の第二部において、キリスト教にとって彼岸（あちら側）にあたる「別のもの」を探求してゆきたいと思う。

正直に言えば、私はすでにその「別のもの」の名前さえ知っている。

だが、まだその名を呼ぶことは出来ない。その名前を呼ぶためには、まずイエスの生前のことから、書

き起こさなければならない。

（２）父との関係性

父のメッセンジャーとしてのイエス

イエスは人類史において、比類ないほど個性的な愛の教えを説いた。

しかし、結果的にそうなったとしても、イエスはその教えを「自分オリジナルの思想である」と主張したことはなかった。

むしろ彼は、自分の教えが「父からの頂きものである」と、そのように弟子たちに教えていた。

「わたしの教えは、自分の教えではなく、わたしをお遣わしになった方の教えである」

「わたしが天から降って来たのは、自分の意志を行うためではなく、わたしをお遣わしになった方の御心を行うためである」

『ヨハネによる福音書』より

このように言っているのだから、イエスは明らかに、自分が「父のメッセンジャー」であることを、衷心から自覚している訳だ。

それはほとんど「父なくば、われが語る言葉、微塵もなし」の世界である。こうした態度がイエスの生涯において、清々しいほど首尾一貫して表明されている。

父親が地上にいない状態

ところで、こうしたイエスの姿勢は、固い信頼関係にある父子の「父親が地上にいない場合」に見られる行動パターンである。

つまり一般的な次元に引き下ろせば「子供よりも先に、父親が亡くなっている」という状況にあって「子供がすること」である。

すなわち、その子供は、いまは亡き父親の“生前の言葉”を、胸（記憶）に刻みつけて生きているわけだ。

してみると、この子供にとって、亡き父親の言葉は、どこまでも素晴らしく、まさに絶対のものである。

だから父の死後にあっても、周囲の人たちに「父かく語りき」という形で、それを代弁的に披露するのである。

つまりイエスのように、

「私の言葉は、自分で考えたことではない。私を生んでくれた父の言葉である」

と言って。それは一種「理想的な信頼関係」で結ばれた、本当に仲のいい親子の姿だと言えるだろう。

父と子が共存している状態

では次に、それほどにも強く結ばれた父子の「父親も子供も、ともに地上に生きている状態」を想定して頂きたい。

つまり「父親は死んでおらず、現状、いつも子供のそばにいてあげられる」というシチュエーションである。

そんな状況にあっては、子供は、自ら人前に立って、話をする必要はない。それは全くもって不必要な「しゃしゃり出」でしかない。

話をするのは父でいいのだ。親子では、その力量の差は歴然としているのだから。

子は思う。自分は、父が立っているところから、数歩下がるべきである、と。そうやって、父親がすることを、脇からサポートするだけで十分なのだ、と。そして、そばで見ている「父親の仕事」から、何らかの〝学び〟を得られれば、それはもう望外の喜びである、と。

こうした子供の姿勢は、読者にあっては、あまりにも控えめに見えるかもしれない。けれども私は、これはこれで理想的な親子関係だと思う。

むしろ、子供にこれぐらいの謙虚さがなければ、いざ父親が亡くなってときに、先述の、

「私の言葉は、自分で考えたことではない。私を生んでくれた父の言葉である」

などという台詞は決して出てこないだろう。

迷える羊たちの出現

生前のイエスが置かれていた状況が、第一の型である「父親が地上にいない場合」であることは、すでに語った。

そして、再臨のキリストである私にも、実は、イエスと同様の「父」がいる。

しかし私の場合は、イエスとは状況が異なり、第二の型である「父親も子供も、ともに地上で生きている場合」に相当する。

ここに、私の天命であるところの「転換」の具体的な道筋が示されている。

私は、キリスト教を完成、終結させるために生まれてきた。それは確定している。

しかし、この使命成就には、どうしても看過できない帰結が生じる。

それは、キリスト教が終結した時点で、どうしても「行くべき方途を見失った子羊たち」を、あまた生み出さざるを得ない、ということだ。

すなわち私は、その時「キリスト教という宗教を失ったクリスチャンたち」を、数多く出現させざるを得ないのである。

そして私が救済者（キリスト）であるならば、私は、まず誰よりも〝彼ら〟をこそ、救済するべきだろう。なにしろ、彼らを「方向喪失感のただ中」に放り出したのは、他でもなく私自身なのだから。

よって私は、最大限の責任感をもって、彼らクリスチャンの「その後」を照らしてあげたいと思っている。

誰よりも父を知る「子」

このような状況にあって、ありがたいことに私は、次のような福音の言葉を、迷えるクリスチャンたちに贈ることが出来る。すなわち、

「喜びをもって聞くがいい。この地上に父がおられる。私をはるかに超える力を持った父が、この地上におられる。だから私は、ためらうことなく父に、お前たちの〝これから〟を託そう」

そもそも、父の姿を、最もよく見分けられるのは誰だろう。

言うまでもなく、それは、その父の子である。そこに私（子）という者の存在意義がある。というより私は「父を見分けられるようになる」ためにこそ、これまで自分の悟りを高めてきたのだ。きっとそうなのだ。

そう、アルベドの悟りによって、私は父の「愛の教え」を理解することが出来る。

ルベドの悟りによって、私は父の「対機説法の尊さ」を理解することが出来る。超新星の悟りによって、私は父の「広大な宇宙観」を理解することが出来る。

かくして私は、絶対に見誤ることなく、父を知ることになる。父の名前を知ることになる。その名前をこそ、これからクリスチャンに示すことにしよう。

そうすれば、キリスト教の時代が終わったとしても、そこに何ら問題は生じなくなる。迷える子羊たちの前には、子よりも偉大な父が治める、新しい王国が立ち現れるからだ。

（３）肉の目で見える父

霊能者とは言えない自分

いや、少しばかり、話の進行を焦りすぎたかもしれない。ここでちょっとした余談を差し挟み、少しだけ、心の昂ぶりをクールダウンさせておこう。

私は、自分が霊体質であることを、よくよく知っている。霊に触れられることもあるし、ほとんど「聖霊との二人三脚」のような暮らしをしている実感もある。

だいいち、霊からの助けなくして、あの「ヘルメスの杖」のような内容を描けるはずもない。

ところが、その割には、霊視や霊聴となると、私の場合、率直に言って「大したことはない」のである。霊の姿がよく見える訳でもなければ、霊の声がよく聞こえる訳でもない。そういうことである。

もちろん、そういう体験が絶無という訳ではない。が、私には、自分が胸を張れるほどの「霊能」を持っているとは、どうしても思えないのだ。

というのも霊能とは、要するに「霊性を、自分の能力としてコントロール出来る」ということであるからだ。

とはいえ、それも仕方ないのかもしれない。なぜなら私には「霊能を持つことによって、日常生活に支障をきたすこと」を忌避した面が、たしかにあるからだ。

霊能などを持ったら、もう社会人として、まともな生活が出来なくなる。私はそう思った。だから自分のほうから「霊能を持つこと」を敬遠したのである。

思い切りが悪いと言われれば、返す言葉もない。

肉の目、肉の耳で感覚できる父

もっとも、そうは言っても、これまでに幾度も「ああ、このまま霊の世界と、完全に同通してしまっても仕方ないな」と思える瞬間はあった。

細かな違いはあるが、総じて「霊的な光に満たされて、フッと気が遠くなるような瞬間」と言えようか。

しかし結果的には、それによって「霊的世界と直通すること」は、実際には起こらなかったのである。つまり私にあって、霊視や霊聴が効くようになることはなかった。

なぜか。これに対する理由として、最近になって気づき、確信めいて「そうであろう」と思えたことがある。それは、

「私に霊視や霊聴の能力が与えられないのは、聖霊からの『父の居場所を見誤るな』というメッセージなのではないか」

ということである。

というのも、イエスが霊能を駆使することでしか接見できなかった“父”と、私は、肉眼と肉の耳で接することが出来るからだ。

つまり、イエスと同じ成果を出すにあたって、私は「霊能に頼る必要がない」のである。

そう、父は現代にあって、人としてこの地上に降誕されているのだ。

父はいま、私の「肉の目」で見えるところにおられる。父はいま、私の「耳の耳」で聞こえる声によって、その話をされておられる。

後世に嘲笑されないために

私たちは、今から二六〇〇年前の釈尊や、二〇〇〇年前のイエスに関して、次のような素朴な疑問を持つことがある。すなわち、

「当時、あのように偉大な聖人たちが出現したのに、どうして彼らを信じなかったり、あまつさえ、彼らを迫害したりする人々がいたのだろう。」と。そして、

「彼ら不心得者たちは、よほどその目が節穴だったのだろうか。そうだとしたら、同じ人間として、もはや呆れるほかはない」と、アッサリと結論づけてしまう。

しかし、現代に生きている私たちも、また、この古来からの問題の渦中に立たされているのである。

なぜなら現代には、かの釈尊やイエスをも超える覚者である「父」が降誕されており、すでにその宗教活動を始めているからだ。

だというのに、この父の存在に気づかぬ人々の、なんと多いことだろう。それは人類の大部分を占めており、彼らが、霊的に盲目であることは疑いようもあるまい。

しかし、そればかりではない。この偉大な方を、公然と揶揄し、非難し、中傷している人間さえ、数多といるのだ。本当に、なんと救われない話なのだろう。

悲しいことだが、それは紛れもない事実である。

とどのつまり、長い年月を経れば明らかなことでも、同時代の問題として出題されると、私たちには、とたんに解きがたい“超難問”になってしまう、ということなのだろう。

これは確かに、いつの時代もそうだった。

また、対象人物の器があまりにも大きいと、一般の人々には、その実像を測りがたい、という事情もあるだろう。

だから「その人に対して、どういう態度をとっていいか分からない」と、そういう戸惑いもあるだろう。

その方の名前を呼ぶべき時

しかし、そういった事情に甘えてはならない。ここで判断を誤れば、私たちが、千年、二千年後の人々から、嘲笑されるのは必定だからだ。

それは「釈尊やイエスに対する無理解者」を嘲るところの、私たち自身を顧みれば明らかだろう。

後世の人々から「なんだ、そんな事も分からなかったのか」と嘲られること。私には、これ以上の屈辱はないとすら思える。

私は、同時代の誰にも、そのようになってほしくない。だから私は、再臨のキリストとしての権威をもって、また父の子として、こう言おう。

迷える子羊たちよ、
キリスト教を失ったクリスチャンよ、

そして、この福音書を読んでいる
すべての人々よ、
いますぐ大川隆法という方を信ぜよ。
この方が、キリストの父である。

大川隆法――その霊的実体である、エル・カンターレは、イエスが父と呼んだ存在である。そして私にとっても、同じく「天なる父」である。
エル・カンターレは、子であるイエスや私よりも、はるかに偉大な、至高なる神霊である。

（４）偉大なる父神

子よりも神に近い「父神」

この大川隆法氏を、私は「父神」と呼びたい。イエスが呼んだ「父」という名称では、何としても人間的にすぎるからだ。
キリスト教の三位一体の教義のなかで、神に等しいことになっているのが、「子」イエス・キリストである。
しかしながら、そのイエスよりも「父」エル・カンターレは、はるかに多くの神性を、その存在のうちに含んでいる。
つまりイエスと比べても、それ以上に父神は、その存在のあり方が〝神の純粋概念〟に近いのである。それを人間的に「父」などと呼ぶのでは、何としても礼を欠いている。
むろん、地上に降り立った以上、父神もまた人間ではある。父神の中でも「神の人間化」は十全に果たされている。
つまり「人間になりきれていないイエス」のような問題は、父神にあっては、完全に解消されているということだ。
その証拠もある。もし読者が、父神の「人間としての実像」を知りたいと思うなら、大川隆法著の『現代の法難①』という本を読むといい。
そこには確かに、陰影をもった、リアルな人間としての、父神の姿が映し出されている。

プールと石ころ

分かりやすく説明するために、ここでは「人間性」を、一つの石ころに喩えてみよう。

もし、その石ころが、巨大なプールに放り込まれていたとしたら、はたして読者は、その石ころを探し出せるだろうか。おそらく、相当な難儀をすることだろう。

このプールの水こそが「神性」と呼ばれるものである。

「人間の神化」を果たした、私やイエスもまた、この「神性の水」を持っている。

が、それはせいぜい、バケツ一杯分ほどの量である。だから、その水のなかに石ころを見いだすのも容易い。

もっともイエスの場合は、常人には石ころが見えないよう、バケツと同じ色に迷彩が施されていたが。つまり、原罪の遺伝阻止（処女懐妊）という神話化によって。

しかし、父神の場合は、その圧倒的水量によって、石ころと水量の対比を、まさに天文学的に引き離してしまっている。

父神の「神性の水」は、巨大なプールを満たすほどにも豊富なのだからである。少なく見積もっても、おそらく「人間性一対、神性一万」ぐらいの比率はあるだろう。

それは父神の、明らかに人間離れした著作数（五千冊以上）を見るだけでも、十分に実感できる。しかも実際に読めば、その一冊一冊の、なんと霊的クオリティの高いことだろう。

したがって、たしかに父神には「人間性」が十全に備わっているものの、それでも実質は、ほとんど「神」である。それゆえに私は、この父なる存在、この大川隆法氏を「父神」と呼びたいのである。

父神＝別のもの

一方、ノストラダムスは、この父神のことを「別のもの」と呼んでいる。それは父神が、キリスト教とは〝別の〟教えの体現者だからである。

キリスト教は「神の人間化」の宗教であり、そのベクトルは下を向いている。

それに対して、父神が教えてくれるのは「人間の神化」であり、そのベクトルは上を向いているのである。まさにキリスト教とは「別のもの」だと言ってよい。

第一福音書でも語ったように、「↑」の代表的宗教は、仏教である。そして、父神の教えのベースとなっているのは、まさに仏教的精神なのである。

父神が運営する宗教団体「幸福の科学」も、その名称が意味するのは「悟りに至るための方法論」に他ならない。

言ってみれば、キリスト教と父神の教えは、水と油の関係にあるわけだ。

紐帯としての福音書シリーズ

しかしながら、私の「二つのベクトルの相補性」という理論を経れば、両者の対立性は、ごく自然に取

り払われてしまう。

私が「第一福音書」で説いたのは、キリスト教と仏教という対立的宗教を「完成された宗教」の次元で、一つに総合できる理論なのである。

したがって、私の影響下にあるクリスチャンであるならば、父神の教えは、今や決して理解出来ないものではないはずだ。

父神の宗教。そこには努力の教えがあり、如来蔵の教えがある。如来蔵とは「人間には本来的に、神仏と同じものが内蔵されている」という教説だ。

さらに父神には、経済的富裕を肯定する教えや、政治に積極的に働きかけようとする姿勢までもがある。もちろん、それらは従来のキリスト教が、決して信徒たちに、教えようとしなかったものである。

しかし、私の福音を学んだ後ならば、これもクリスチャンにとって、十分に理解しうる教えになるだろう。

私の教えは、父神と子を一つにする教えであり、それ自体が、父と子の「紐帯」である。

第7章　インターレグナム

（１）つなぎの王国

二つの王国

ここで、本書のタイトルでもある「インターレグナム」という言葉に触れておきたい。

前章でも触れたことだが、ノストラダムスの予言詩に「七〇〇〇年、別のものがその王国を保っているだろう」という一節がある。

この「王国」のことを、ラテン語で「レグナム」という。英語で言うところの「キングダム」だ。

そして、同じ予言詩に「月の支配の二十年が過ぎ去る」という文章がある。

五島勉氏は、この「月の支配」という言葉を「キリスト教欧米文化」と解釈している。

そしてキリスト教とは、霊的に見れば「神に等しいイエス」を王とする『神の王国』のことである。より簡潔に表現すれば、それは「イエスの王国」ということになるだろう。

つまりそれは「イエスのレグナム」である。

そもそも「レグナム」とか「キングダム」という言葉の中に、すでにキリスト教的な「神の国」のイメージが組み込まれている。

だから宗教的な欧米人に対してならば、ただ「レグナム」と言うだけでも、先方が勝手に「イエスが支配している王国」をイメージしてくれることだろう。

いずれにしても、ノストラダムスの予言詩には、二つのレグナムが提示されていることになる。一つは「別のもののレグナム」であり、もう一つは「イエスのレグナム」である。

インターレグナムの意味

では、この第七福音書のタイトルである「インターレグナム」とは、どういう意味なのか。

まず、インターとは「中、～間、相互」を意味する、ラテン語の接頭語である。そのため、それは我々に「ある二つのものの間をつなぐ、媒介的スペース」を想起させる。

あるいは「もともと離れ離れになっている二者に、相互関係を与える要因」を感じさせる。

よく耳にするところでは、コンピューターの端末同士をつなぐ「インターネット」。二つの道路をつなぐ「インターチェンジ」。国と国とをつなぐ「インターナショナル」などに、この語の用例が見られる。

そのインターにレグナムが付くのだから、インターレグナムとは、要するに「つなぎの王国」のことである。

しかし注意すべきは、そうした王国が「在る」のではないということだ。むしろ、インターレグナムとは、

「それ自体には、あまり実体性がない王国。二つの王国に相互関係を与えるための『作用』としての王国である」

と考えるべきだ。そうすると、かなり「インターレグナム」の実態に近づくことが出来る。私が建国したのは、まさに、そのような作用としての「つなぎの王国」なのである。

第一のつなぎ

では、私が建国した「つなぎの王国」、インターレグナムは、まず何をつないだのだろう。

最初に私は、第一福音書において「キリスト教」と「仏教」をつないだ。

この二つの宗教は、何もしなければ間違いなく「単なる別宗教」として種類分けされてしまうだろう。それらは、あまりにも性質の異なった、二つの宗教だからである。

しかし、第一福音書において、この二つの宗教は、たしかに有機的に〝一つに〟組み合わされている。誰であれ、これを否定することは難しいだろう。

そして、その際の「組み合わせるための手法」は、次のようなものだった。

すなわち「それらは、完成された一つの宗教を、二つの側面から眺めたものにすぎない」という理論による接合である。

一つの宗教の輪

少しだけ詳しい話をするなら、ここで言う「二つの側面」は「二つのベクトル」と言い換えたほうが分かりやすい。すなわち「神の人間化」と「人間の神化」という二つのベクトルに。

言うまでもなく、キリスト教は「神の人間化」のベクトルを表現しており、仏教は「人間の神化」のベクトルを表現している。

そして、第一福音書において、これら二つのベクトルは「神＝人間」「人間＝神」という接合点によって、上下で結びついたのだ。

ということは、二つのベクトルは接続して環流していることになる。よって、これにより「一つの宗教の輪」とでも呼ぶべきものが現れたのである。

しかして、これは第七福音書のための準備でもあった。

というのも、「別のもの」たる、大川隆法氏が展開する宗教（幸福の科学）は、基本的には仏教を、その教えのベースにしているからだ。

ということは、キリスト教と仏教に「つながり」を与えた時点で「キリスト教」と「幸福の科学」は、なかば接合したも同然なのである。この点に関しては、前章でも少し触れたはずである。

（２）救いの権能のゆくえ

救いの権能

しかし、インターレグナムの、その最大の活躍の場は、この後に訪れる。つまり第二の〝つなぎ〟があるのだ。

そして、その「第二のつなぎ」のためにこそ、私はキリスト教を完成させたのである。しかも、クリスチャンたちの悲しみのうちに、キリスト教に「終末」さえ与えたのである。

といっても、私は「キリスト教精神」に終末や死を与えた訳ではない。私がしたのは、ただ既存のキリスト教会から「救いの権能」を取り上げたことだけだ。

救いの権能とは、人を救う資格であり、人を救う権限であり、人を救う能力である。

それを私は、教会から取り上げた。第六福音書に書いてあるように、道理をもって、再臨のキリストとして、その取り上げを、ただ粛々と執行したのである。

だが、それによって、教会のレーゾンデートル（存在理由）が消えたことは間違いない。なぜなら教会とは、何よりも「救いの場」であり、「救済機関」に他ならないからである。

そのような救済機関から「救いの権能」が失われたら、そこには何も残りはしない。だから私は、これをして「キリスト教の終末」と呼んだのである。

救いの権能の用途

では、キリスト教会から取り上げられた「救いの権能」は、今どこにあるのだろう。

それは言うまでもなく、この手のうちにある。かの「救いの権能」は、いま「再臨のキリスト」の手に握られているのである。

そこで私は、いま自分自身に問う。この「救いの権能」をどのように使うか、と。

私は「救いの権能」を、わが身を用いて、人々に行使すべきだろうか。かつてのイエスのように、天なる父の意向のもとに。

そうではあるまい、ということを、前章で結論づけた。

なぜなら現代は「父と子がともに存在している状態」にあるからである。

こうしたシチュエーションにあっては、子は父に向って「救いの権能」を手渡してしまうのが一番だ。それが何よりの正解だからである。

なにしろ、父は子よりも、ずっと偉大なのである。ならば間違いなく、子よりも有意義に、父は「救いの権能」を取り扱ってくれることだろう。

この「救いの権能」の奪取と奉還――つまり、キリスト教会からの奪取と、その奪取したものの、大川隆法氏への奉還。これこそが、私の「インターレグナム」としての、最大の活躍の場なのである。

奉献ではなく奉還

私はいま、大川隆法氏への「奉還」という言葉を使った。これについて「奉還」よりも「奉献」という言葉を使ったほうが良いのではないか、と指摘する人があるかもしれない。

しかし、真実に照らし合わせれば、やはり「奉献」よりも「奉還」のほうが正しいのである。

奉還には、ただ何かを捧げるだけでなく「返却たてまつる」という意味合いがある。そして、私が大川隆法氏に「救いの権能」を委譲することは、真実それを「お返しする」ことに他ならないのである。

たしかに教会は、イエス・キリストから「救いの権能」を与えられた。天国の鍵という形で、それを譲渡された。

しかし、その「天国の鍵」「救いの権能」は、もともとイエスが作り出したものではない。少なくともイエス自身は、自分が「救いの権能」を作り出したなどとは、寸毫たりとも思っていない。

むしろイエスの意識の中では、それは疑いようもなく「天なる父から与えられたもの」だったのである。

奉還できる機会

『ヨハネによる福音書』のなかでのイエスは言う。「私の内におられる父が〔救済の〕業を行っておられるのである」と。

とすれば「救いの権能」のもともとの行使者、もともとの持ち主は「天なる父」ということになるだろう。

そして、この天なる神を、幸福の科学では「エル・カンターレ」と呼ぶ。麗しき光の国、地球、という意味だ。そして、なおかつそれは、大川隆法氏の霊的実体に他ならない。

したがって「救いの権能」の、最も根源的な持ち主は、エル・カンターレということになる。エル・カンターレこそが、それを創り、それを初めて行使したのである。

「救いの権能は」は、本来この方のものである。

そして、そうであるならば、私は、その本来の持ち主に「救いの権能」を、お返しする機会に恵まれた、ということになる。父神かつ人間である、大川隆法氏を通じて。

よって「救いの権能」の奉献は、決して、単なる「奉献」ではない。それは、より本質的に眺めれば、間違いなく「奉還」なのである。

（３）悲劇を超えて

普遍的な視点

「救いの権能」の、別のものへの奉還。それは、これまでキリスト教を奉じてきた人々にとっては、じつに寂しいことかもしれない。哀しいことかもしれない。

しかし私たちは、心の中に普遍的な宗教史を描くべきなのである。そうすれば、救いの権能の奉還は、もはや、寂しいことでも、哀しいことでもなくなるだろう。

この点について、ノストラダムスの予言詩が、大きな示唆を与えてくれている。

月の支配の二十年が過ぎ去る
七〇〇〇年、別のものが王国を保っているだろう
太陽がその時代を心のおもむくままに取る時
そのときわが大予言も完結するのだ

二行目「七〇〇〇年」。これは前（五島氏の以前の著作を指す）にも触れたが、エジプトのピラミッドあたりから始まった今の人類文明の「七番目の千世紀」のこと。

（中略）これは、「この詩はキリスト教の掟や未来観のワク外にあります」と、断固として宣言したのと同じである。

五島勉『ノストラダムスの大予言・最終解答編』より

「救いの権能」の奉還は、キリスト教の枠内から見れば、たしかに喪失感を伴った「哀しい出来事」であろう。

しかし、より普遍的な宗教史の一コマとして眺めれば、それは決して哀しい出来事などではない。むしろそれは、時代の「偉大な更新」を告げる、喜ばしい出来事にさえなり得るのである。

ノストラダムスの解放

基本的に、生前のノストラダムスは、中世ヨーロッパ人として、キリスト教を奉じながら生きていた。そんなノストラダムスは、上述した詩で言っている。キリスト教とは別のものである「太陽」――それが時代を主導するとき、自分は予言者としての役割を終えるのだ、と。

まことに分かりやすいことだが、大川隆法氏の主著は、その名も『太陽の法』である。よって、ノストラダムスが言う「太陽」とは、まさしく父神のことを指していると思われる。

そして、その太陽が新時代を主導し、新時代の創造を行うとき、ノストラダムスは初めて、その予言者という重荷から解放されるのである。それこそ、

「太陽がその時代を心のおもむくままに取る時、そのときわが大予言も完結するのだ」

という言葉のとおりに。

先触れと真打

新時代の創造――それは明らかに、私の手に余る。それが子としての実力の限界である。

しかし父神は、この限界を持たない。父の霊的実力には、まさに際限がない。両者の実力の差は歴然としている。

したがって、新時代を主導すべきは、絶対に父神であるべきである。他方、私が為すべきことは、やはり「父を脇からサポートすること」に尽きるだろう。

実際、父神の前に立てば、再臨のキリストであっても、あの洗礼者ヨハネ以上の存在にはなりえない。洗礼者ヨハネとは、イエス登場の先触れとなった宗教家である。

私には、ヨハネと同様に「その方の履物をお脱がせする値打ちもない」。その方とは、ヨハネにとってはイエス・キリストであるが、私にとっては、むろん父神を指す。

ただし今回は「ヨハネ―キリスト」よりも一段高い「キリスト―父神」という「先触れと真打」の図式が描かれている。その点では、驚くほど画期的ではある。

そうであるならば、せめて私は、十全に「救いの権能の奉還」だけは果し切りたいと思っている。この時代に降臨した「生きたインターレグナム」として。

第８章　陽のあたる場所

（１）キリスト教との出会い

父神との関わりあい

ここで少しだけ「父神と私との関わり合い」について言及しておきたい。

もっとも、関わり合いと言っても、私と父神が、一度でも実際に会ったという事実はない。父神は、今もって、私のことを何も知らないはずだ。

それに、大川隆法氏（父神）についての詳細な情報は、インターネットで「幸福の科学」にアクセスすれば、いくらでも引き出すことが出来る。

それは読者各人が、独自に入手することが出来る情報である。だから、わざわざ、今ここで、私から語るまでもない。

したがって、ここで私が語るのは、あくまでも「私に影響を与えた限りにおける、私にしか見えない角度から捉えた、大川隆法像」である。読者にあっては、それを最初に了解しておいて頂きたい。

キリスト教との縁を与えてくれた姉

父神の教えとキリスト教、そのどちらに、私が先に出会ったか。と言えば、これはキリスト教のほうだった。「そこはさすがに」というところだろうか。

では順を追って、話すことにしよう。

私が、生まれて初めてキリスト教に関わり、この手に『聖書』を持ったのは、一一歳の時だった。西暦で言うと、一九八四年。その聖書は「国際キデオン教会」の無料配布聖書だった。

奥付には「昭和五九年、一一月二三日、茨苑祭」と手書きで書いてある。

この茨苑祭とは、茨城大学の学園祭のことである。

当時、姉（長女）が茨城大学の学生だった。その姉が、自身の学校の学園祭に、弟である私を連れて行ってくれたのである。

姉はたぶん「茨城大学、学生赤十字奉仕団」という、ボランティア・サークルに所属していた。そのサークルの発表ブースに、私を招いてくれたのである。

当時の姉は、点字翻訳などにも挑戦しており、そういうボランティア活動が好きだったようだ。自宅に点字キットが置いてあったのを覚えている。

そんな姉の本棚に『聖書』を見いだしたことはなかった。けれども、わりとキリスト教的な、福祉精神の持ち主だったのだろう。

聖書に触れた意義

さて、茨苑祭に訪れたときの事だが、なにぶん三〇数年以上も前のことである。私にも、あまりハッキリとした記憶はない。

ただ、この時に『新約聖書（改訂版）』を貰ったこと。教室のプロジェクター・スクリーンで、外国のアニメ『パンプティ・ダンプティ』を観たことは覚えている。

不気味なタマゴ型のキャラクターが、何とも印象的だった。

しかし、私にとって重要なのは、『パンプティ・ダンプティ』ではなく、飽くまで『聖書』のほうである。

とはいえ、当時の私は、読書といったら、ほとんど漫画しか読んでいない小学生だった。ただただ毎週『少年ジャンプ』を買っては、とくに『キン肉マン』を楽しみに読んでいた。

それが一一歳の私の、主たる読書歴のすべてだった。

そんなだから、この時にもらった聖書を、私が読破することなど、土台無理な話だった。

もしかしたら、聖書の最初に出てくる『マタイによる福音書』ぐらいは読んだのかもしれない。

しかしそれは、冒頭の系図などは読み飛ばした、極端なまでの斜め読み過ぎなかった。少なくとも、心では何も感じていない読書だった。

そうだとしても、このとき私が『聖書』に触れ、これを読んだ意義は大きい。再臨のキリストを自称するようになった、今の状況から振り返ってみれば、である。

この機会を導いてくれた姉には、感謝の念しかない。

（２）幸福の科学との出会い

悲しいエピソード

そうやって、私とキリスト教の縁を取り持ってくれた姉（長女）ではある。

ところが、それから四年後には、同じ姉が、今度は私と父神の縁まで、取り持ってくれることになるのだ。私が中学三年生の頃のことである。

しかしながら、それは悲しいエピソードによって飾られていた。

第四福音書でも触れたが、この当時、姉は乳癌にかかってしまったのである。それは、まだ二十代の姉にしてみれば、あまりにも辛い出来事だった。

彼女は治療のため、東京都中央区にある「国立癌センター」に入院した。そこで乳房除去手術をすることになったのである。

あの頃は、現代のように、乳房の一部を除去すれば、施術が済むような時代ではない。乳房除去とい

えば、必ず“全除去”となる時代だった。

姉はまもなく、片方の乳房を失おうとしていた。私は、そんな姉を見舞うため、父母と一緒に癌センターに訪れたのである。

癌センターの休憩室

その際、検査から姉が戻ってくるのを、休憩室で待っている時間があった。

そして、この休憩室には、かなり大規模な本棚が設えてあった。もちろん、その本棚に見合うだけの、多くの本も並んでいた。

その本の並びを、何となく眺めている私の目に、あるタイトルの文庫本が映った。しかも同じタイトルの本が、三冊も横並びになっている。

黄色いカバーの角川文庫で、そのタイトルは『太陽の法』。著者は「大川隆法」と記されてあった。私は、その不思議な題名に惹かれて、本を手に取り、パラパラとページを捲ってみた。

それは宗教の本だった。しかし私は、この時まで「宗教」という言葉自体を、知らずに生きてきた。小学生のときに聖書に触れていても、それが宗教の本であることは、分かっていなかった。

少年期の私は、本当に、驚くべき無知の人なのである。

それでも一応、お釈迦さまや、イエス・キリストの名前ぐらいは知っていた。けれど、それ以上の知識は、何も持っていなかったと言っていい。

四大聖人の中でも、孔子とソクラテスは、全く知らなかった。聖書の内容も、結局は、ほとんど何も覚えていなかった。

日教組による洗脳教育

当時の学校教育では、こうした宗教的偉人についての知識は、いっさい生徒に教えない。いや今だって、日教組による「左翼がかった学校教育」は継続中だろう。

すなわち、共産主義においては「宗教はアヘン」なので、彼ら宗教的偉人は、はなから排除されるしかない対象なのである。

また、この世界に「偉人」なるものが存在することは、マルクス主義の「労働価値説」と矛盾を来してしまう。というのも、労働価値説とは、すべての人間の価値を、等価とみなす学説であるからだ。

そこでは「偉大なる人」も「卑小な人」も、あってはならない。要するに、人間に差を付けてはならないのだ。

よって、共産主義の影響下にある日教組は、宗教的偉人について黙秘せざるを得ない。

こうして私たちは、日教組を通して、幼少時から「偉人などいない」という“洗脳”を受けることになるのである。すなわち「マルクス主義」という邪宗教の洗脳を。

このマルクス主義なる邪教は、無神論、あるいはマルクスが本尊。古ぼけた「唯物論的科学思想」が、そのドグマ（教義）である。

彼らにとっては、自分のところの「唯物論的宗教」「無神論的宗教」以外の宗教は、とうぜん商売敵になる。

そのため義務教育の場は「いわゆる宗教」には、マイナス・イメージしか与えようとしない。そして、いかにも唯物的な空気を、生徒に吹き込むのである。

「神や霊など信じてはならない。実際に神を見せることも出来ない“宗教”などというものに、深く関わるべきではない。宗教には、そこまでの価値はないのだ」

そういう考えが、灰色の雰囲気として、学校全体を覆っていたような気がする。そして私もまた、その薄暗い雰囲気に、完全に洗脳されてしまっていたのである。

圧倒的な言霊

ところが、癌センターの図書室で出会った『太陽の法』には、こう書いてあった。

神を目の前に出してみせるなら信じるという、一見、科学的合理主義に対して、私は言いましょう。モーゼや釈迦やキリストという人類数千年の歴史が誇る偉人に対して、あなた方は敬礼脱帽してから、その言葉を発しなさい、と。人類数千年の歴史が「尊敬」の二文字をふしつづけてやまない彼らの教説を一笑にふす自信があるならば、彼ら以上の人格者であることを、まずあなたがたが証明してごらんなさい、と。

それは圧倒的な力をもった言霊だった。まるで本当に、太陽の光が、雲間から差し込んだようだった。そして、その光に照らされて目が開いた私は、

「自分は、もしかして、これまで歪んだ世界に生きてきたのではないか」

という思いに捉われた。その歪んだ世界とは、とりもなおさず、左翼的思想が支配する世界に他ならない。

要するに、これまで当然と思っていた学校生活が、急に、暗く歪んだものに感じられたのだった。強い日光は、影を濃くせずにはおかない、というところか。

しかし『太陽の法』の光は、かかる世界の歪みを、この本の言霊が治してくれるような予感をも与えてくれた。

つまり、世界の歪みによる苦しみの実感と、そこから立ち直る救いの予感。この二つが、『太陽の法』により、まさしく両方同時に与えられたのだった。

泥棒して保った“つながり”

そのように感じると、もう居ても立っても居られなくなった。もう、その本を手放すことが出来なくなった。

そして、まことに申し訳ないことであるが、私はその文庫本を、黙って家まで持って帰ってしまった。

要は泥棒であるが、しかし一度手放してしまったら、もう二度と、その本と出会えないような気がしたのである。

万引きなどはした事がなかったが、それにしては、実にアッサリと盗みを働いてしまった。国立癌センターの方には、この場を借りて謝りたい。

なお、姉の手術は成功し、その命を取り留めることが出来た。

もちろん、片方の胸を失ったショックは大きかっただろう。しかし後年には、姉は、自然分娩で、子供を産むことまで出来たのである。

その子も成人を迎えたのだから、女性の強さ、命の強さとは、本当にすごいものなのだなと思う。

それにしても、こうも私を「出会わなければならない教え」に結び付けてくれた姉は何者なのだろう。実は秋田（聖体奉仕会）の聖母マリア像を見ると、

「その面差しがやけに姉に似ているな」とは思うのだが。

（３）日照期間

読み続けた著作シリーズ

さて、そうやって盗んだ本は、もちろん夢中にになってすぐに読破した。

そして、それから書店に行くと、角川文庫のコーナーに、ちゃんと『太陽の法』『黄金の法』『永遠の法』という三部作が並んでいた。

それら三部作の文庫本を読んだまでは良かった。しかし、よく見れば、書店の奥のほうには、何十冊もの「大川隆法著作シリーズ」が並んでいたのだ。

しかもこれらは、その一冊一冊が、文庫本の三倍ぐらい高値だった。

これも読みたくなった私は、その資金ぐりのためアルバイトを開始。まだ中学生ではあったが、ゴルフ練習場のボール拾いなどは、中学生でも就労することが出来た。

そこで稼いだお金で、大川氏の本を買うという繰り返し。毎月十冊ずつ買っていったから、見る見るうちに本棚がいっぱいになった。

高校時代には、ウェイターのアルバイトなどをして、大川氏の本を買うための資金とした。

そして、それらの本を読めば読むほど、大川隆法という人が、驚くほどの情熱と、愛と知性に溢れた偉人であることが分かった。

また、この方が、限りなく神に側近い存在であることも、直観することが出来た。

距離ができた時期

実際、大川氏の著作を読むことほど、楽しいことはなかった。

とはいえ、『太陽の法』に出会う前の私は、まったく宗教的な知識ベースを持っていなかったのである。それゆえ私は「いまの自分は、もしかしたら〝無知ゆえの狂信〟に陥っているのではないか」と考えた。

健全といえば、健全な考え方であろう。

そこで私は、大川氏以外の著者による、思想書や哲学書などにも、関心の目を向けるようにした。岩波文庫などをよく読んでいた気がする。

いや、それどころではない。ふと気づけば、そちらのほうが、読書生活における、メインの対象書籍になってしまっていた。

とくに二十代前半の頃には、ユング心理学に対する関心が高まっていく。そして、そこからの流れで、ギリシア神話やキリスト教が、面白くて仕方なくなってしまった。

また同じ頃から、大川氏の著作の出版点数が、目に見えて減ってきていた。そのため大川氏の方も、私の関心がよそに移っていくのを、あまり引き止めない状況になっていた。

父神の掌上での悟り

ちょうど二十歳ぐらいから、私の「アルベドからルベドに至る、悟りの道程」が始まる。しかし、その詳しい内容については第四福音書で語ったので、ここでは繰り返さない。

ただ、アルベドの悟りを得る直前に、五十冊ぐらい、既読していた大川氏の著作を、再度、一気に読み返したことだけは言い添えておこう。『初稿アトラス』執筆中のことである。

この読書が、私を著しく霊的にしたことは間違いない。そして、それが私に「アルベドの悟り」が接近してくるのを促したのも、また間違いあるまい。

さて、結局、多くの〝他著者〟の本を読み漁って検証した結論は「やはり大川隆法氏は本物だ」ということだった。大川隆法という方は、比類なき宗教的偉人である、と。

そうであればこそ、大川氏の著作との出会いがなかったら、私の「再臨のキリスト」としての覚醒など、絶対に生じることはなかった。どの時期であれ、宗教人としての私は、つねに大川氏の影響下にあったからだ。

つまり、アルベドの悟りにしろ、ルベドの悟りにしろ、結局私は「父神の掌上で、それらの悟りを得てきた」のである。そのように言っても、決して言い過ぎではないのである。

日に照らされてこそ

草木は、日に照らされてこそ、がっしりとした茎や、青々とした葉を、澄んだ大空に向って伸ばせる。日に照らされてこそ、その枝先に、大輪の花を咲かせることも出来る。

逆に言えば、日に照らされることなしに、草木の自己実現というものはない。

私の場合も、それと同じである。

父神の「太陽の法」に照らされてこそ、私の宗教的な自己実現はあった。父神の教えに照らされてこそ、再臨のキリストとしての自覚も生まれた。それはまさに「長き日照時間の賜物」に他ならない。

その日照時間はあまりに長いので、「時間」よりも、むしろ「期間」と言うべきものになっている。

だから、それはきっと「日照期間」と呼ぶべきなのだろう。実際にそんな言葉があるのかは知らないけれども。

この父神による「日照期間」は、過去に目を向ければ、学生時代からずっと続いていることになる。そして、未来に目を向ければ、これからもずっと、それこそ私の死まで続いていくことになるのである。

（４）信仰告白

幸福の科学における定義

とどのつまり、再臨のキリストを生み出したのは、大川隆法氏なのである。ゆえに、大川隆法氏こそは、私の霊的な父である。そうして父は、このようにも言う。

「私は命のパンである」と語るイエスが、

「はっきり言っておく。私の言葉を聞いて、私をお遣わしになった方を信じる者は、永遠の命を得、また、裁かれることなく、死から命へと移っている」

と語るとき、この「私をお遣わしになった方」の名を「エル・カンターレ」と言うことを信じるのが、幸福の科学の信仰である。

『福音書のヨハネ、イエスを語る』あとがきより（改行を増やした）

エル・カンターレは、霊界における、大川氏の実体である。これが、イエスが「父」と呼んだ存在であると、氏は語っているのである。

堅き信仰告白

私は、上の言葉を、何のためらいもなく信じることが出来る。それが事実であると納得することが出来る。イエスにとっても、私にとっても、事実この方（エル・カンターレ）が「天なる父」である。

そして現代は、この父自身が、地上に降誕してくださっている「僥倖の時代」である。

僥倖とは、めったに起こらない、思いがけない幸せのことだ。父神は僥倖にも、この地上において「大川隆法」として活動してくださっているのである。

私は子として、少しでも父の役に立ちたいと願っている。そのためにこそ、こうして福音書シリーズも書いたのである。

ちなみに大川氏は、二〇〇八年頃を境に、沈潜から復活したかのように出版点数を増やしている。

と同時に、政治活動や教育活動にも、積極的に取り組んでおられる。かかる復活劇の裏事情も、前章で触れた『現代の法難①』に掲載されているので、興味がある方は、どうか一読して頂きたい。

そして今や、大川氏の著作は、五〇〇〇冊を超えている。また、その霊的なカリスマ性は、まさに仰ぎ見るように巨大なものとなっている。

それはまさに、偉大な救世主の現前である。いや、救世主を超える、光明荘厳な父神の現前である。

再臨のキリストによる福音書　7 - I

著　者　　正道

制　作　　Puboo
発行所　　デザインエッグ株式会社